
B.A.R

双寥 健臣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B・A・R

【Nコード】

N4539U

【作者名】

双寥 健臣

【あらすじ】

平凡な少年と少女が異世界へ
理不尽な運命に流される者たちの、想いを描いたストーリー

序章 1 (第三者) 幹也と藍 (前書き)

この小説は、ほぼ一節毎に視点が切り替わります。

サブタイトルの左手に(第三者)等で視点が示されますのでご参考に。

故に読み難い部分も多々かと存じますが、何卒ご容赦ください。

序章 1 (第三者) 幹也と藍

$X + Y = XY$ すべての問題はこの形で説明できる。

ただそれが長くなったり x や y がいたりでややこしくなっているから分かりにくいってだけ、結局のところどんな事もそれだけなんだよ……と、日ごろから物事を深く考えない事を身上にしている

というより難しく物事を考える事の苦手な幹也は、藍の要点を得ない拙い相談に飽き始め、伝わりそうな言葉を選んで並べてみることにしたのだった。

「何言ってるのか意味分からないんですけど、私の話ちゃんと聞いていました？」

当然はぐらかされた事に気づいている藍は、呆れるようにうな垂れてテーブルに漬れている。藍の膨れた顔を少しの間楽しんでいられる幹也、その視線に気づいたのか、藍は上目づかいに睨みこんだ。

「私がいじめに相談しているのに……酷いです」

「聞いてたって、ただこういっただら怒るかもしれないが、悩むような問題じゃないって事を言いたいんだよ」

「悩んでいるからこうやってミッキーちゃんに相談してるんじゃないですか、あんまり変な事ばかり言って誤魔化すなら奢ってあげるの取り消しますよ」

「それは困る。そもそも夜中にいきなり『私が奢ってあげますからいつものBARに集合です！』なんて言われて来ちまったおかげで財布すら持ってきてない。そのうえ忘れてきたタバコもすでに奢っ

てくれてありがとう　　ってかミツキー？　某テーマパークに生息しているお喋りネズミと一緒にすんなよ！」

「そうですね、確かに幹也と一緒にしたら人気者のお喋りネズミさんが可哀想ですよ。でも幹也って名前で良かったじゃないですか、幹だけだったらまるで某国の偽ブランドみたいですから、幹也最高ですよ」

藍ははぐらかしたお返し！　と言わんばかりにつらつらと酷い言葉を並べていく。

「お前はほんと黙って大人しくしてればかわいいのに、勿体無いな。全国の幹さん達に失礼だ、代表として俺に謝れ」

幹也は胸に手を当てた。

「可愛いでしょ」

隣で同じポーズ……。

「そこだけ反応すんのかよ、他人の話ちゃんと聞いているのか？」

「幹也こそ聞いているんですか？」

突然に声のトーンを落として真面目な表情に戻る藍。対する幹也は、あえて気づかない振りをして、動揺を抑えていた。

幹也は抑揚を保ったまま話し始める。

「聞いているって……つまり悩んでいるだけ時間の無駄！　そもそも相談してる藍自身が大まかにしか分かって無いような事を、答えよ

うがないよ。それに俺に言わせりゃそういつことあるけど悩むような事じゃないって、現実とは違うわけだし」

基本的に細かい事は気にしないという幹也らしい考えに、藍は共感を持てなかった。藍は今にも泣き出しそうな顔で、幹也を強く睨みつける。

「それが出来ないから悩んでいるの！ 私は幹也と違って楽観的になれないの！」

そんな藍に呆れたようにため息をつき、幹也はビールグラスを置いて席を立った。幹也は、この手の藍の行動は理解しているためにこの場を逃れようとしていたのだった。

「ちよつとうんこして来る」

幹也はトイレに向かってフラフラと歩いていった。

やりきれない気持ちのまま、藍は窓の外に目をやる。自分の独りよがりだということも理解している藍は、それでも、自分でもどうしようもない不安や苛立ちが心の中にドロドロと渦巻いているのを感じていた。

そんな藍の背中に、唐突に声が掛かる。幹也のものではない凜とした女性の声だった。振り向くと藍の親友、沙耶が立っていた。

去年の春 家から少し離れた大学に通い始め、最初に来た友達
達が沙那だった。

中高大一貫のエスカレーター式の学校で、私のように大学から入った少数派はどうしても人の輪に入りづらく、始めのうちは少なからず寂しさを感じていた。

沙耶もそんな少数派の一人 というより自ら孤独を望んでいるかのような感じだったのを覚えている。

私とは正反対で友達を作らない主義なのか、常に周りの生徒と馴染まず、窓際の席で一人読書をしている。それでいて儂げな印象どころかむしろ稟としていて知的な印象を感じさせる独特な空気を持っている女性だった。

その強い印象と彼女の清楚な外見も相まって、男は勿論のこと女子生徒や先生ですらも彼女に惹かれ声を掛け、するりと壁を作ってかわされるのがお決まりだったのに……そんな他人との間に必ず線を引く彼女が私に声を掛けてくれたときは、いきなり告白でもされたような驚きと動揺を感じた。

何故私に？ という疑問もあつたような気もするけど、私の心に溶け込むかのようにすんなりと馴染む彼女を一目でとても気に入ってしまい、わずか一年足らずで親友と呼べるほどにまで仲良くなっていた。

「あーちゃん、めずらしいわね今日は一人なの？ いつも彼には愛想つかれちゃったかな？」

沙耶はふわりと優しく微笑みながら、子供をあやすように私の頭を撫でてきた。この微笑で撫でられると、私はいつも子ネコのよう

に成すがままになってしまつう。

彼女も家から近いわけでもないのに、何故かこの溜まり場に度々に姿を現す。

今夜も夜のBARに映える黒一色の服装、一見シンプルなドレスなよつで、はたまた寝間着のようにラフにも見える大人びた服装。その独特なセンスが本音を見せない沙耶の空気を際立たせ、なんとも魅力的に演出しているようだった。

「こんばんは沙那。いつも言うけど幹也は彼氏でもなんでもないですから！ それに愛想つかしそうなのは私の方ですよ！ ヒトが真剣に悩んでいるのに……」

「毎回そう言ってるけど、その割にはよく会って飲みに行ってるわよね〜」

沙耶はそう言つて隣の席の幹也のグラスに目を落としてクスクスと笑つた。この手のからかいは毎度のことなのに、私は相変わらず動揺を隠せないまま強がつてしまつう。

「ご想像の通り今日も幹也と一緒にですけど、幹也は彼氏じゃないですから、友達です!」

恒例となつている毎度のやりとりを手をひらひらさせてはぐらかすと、沙耶もさして掘り下げることもなく話題を変えてしまつう。沙耶からすれば半ば挨拶のようなものなんだろうか。

「そんなことよりあーちゃん、前に借りてた本を返したいの、いつなら居るのかしら?」

貸していた本なんて大学で渡してくればいいのに……と思うの

だけど、沙耶に言わせると直接家まで届けるのが礼儀なのだそうだ。

「いつでもいいですよ〜いつも通り合鍵はポストの裏に貼り付けてありますから」

「あーちゃん。いつも言うけど、そんなのじゃなおさら礼儀知らずになっちゃうでしょ」

沙耶は呆れたような いや、明らかに幻滅している顔で答えた。

「……沙耶は本当に律儀なんですね」

「律儀ってわけじゃないと思うけど……まっいいわ、私も少しお話聞かせてもらってもいいかしら？ それともせっかくのデートのお邪魔だったかな？」

飽きずに再三のいじりネタ。「いいですよ〜」と答えつつ例の如く手をひらひらさせてはぐらかすと、沙耶はあたかも当然のように幹也の席に座り、残っていたビールを飲み干してしまふ。

「苦い……マスター何か甘いもの作ってあげて。一緒のもので構わないから二つよろしく」

……私まだ飲んでるのに。

俺は手洗いを済ませて席に向かうと、見覚えのある女性が藍の隣に座っていた。サラツとした綺麗な黒髪に、こんな薄暗いBARの中であつてもくつきり浮かび上がる色白の肌、体系はスラツと細身で、抱きしめたくなるような華奢だった。

その横顔から窺える綺麗な顔立ちに銀フレームのメガネ、目元のほくろが印象的な女性といえば俺の知るところ一人しかない。藍の友人の中で一番俺好みの女、沙耶ちゃんだ。

慌てて隣の席に座ると、沙耶ちゃんはこちらを見て、にっこり微笑んでくれた。俺は平常心を保つべく高ぶる気持ちを抑えて、軽く会釈を返した。ふと、ビールがなくなっていることに気づき、しかたがなく新しくビールを頼む。

「こんばんは沙耶ちゃん。今日は一人？」

「いいえ、バイトの友人と五人で向こうの席で飲んでいたところ」

指した視線の先を見ると、服装からしてアパレル系の4人の男女がこちらをチラチラ見ていた。俺は軽く会釈すると向うも会釈を返してくれた。沙耶ちゃんはそんな彼らを気にもとめず、紫色で透き通った甘そうなカクテルを飲み進める。

俺にもビールが届いたところで、まずは出会いに乾杯する。

「それであーちゃん？ さっきは随分うな垂れてたけど、何を話してたの？」

「話っていうよりも、幹也に相談してただけなんですけど……」

「そうそうその通り！俺が藍に呼び出しを喰らってから一時間くらい経っただろつか？ 延々と夢について語られ、未だに話が済んでいない……トイレから戻った後も続くことを考えれば、ため息がこぼれるよ」

ふと睨んでくる藍の視線を感じて、両手を上げて降参のポーズをとった。どうやら機嫌を損ねたらしい。

「はいはい参りました、冗談だつて。悪かった、そんな睨むなよ」

「あーちゃんの夢？ そういえば聞いたことないわね、あーちゃんは何になりたいの？ 私にも聞かせてよ」

……そつちじゃない。

「沙耶ちゃん、残念ながら将来の夢じゃなくて、寝るときに見る夢の話なんだよ」

「あら、そつちだったのね。それにしても他人に相談するほどなんて、一体どんな夢を見てるの？」

興味深々な沙耶ちゃんの視線に促され、藍は俺を睨むのをやめて話し始めた。

「ううーん一月ぐらい前からなんですけど、同じような夢を毎日見るんですよ。同じって言っても全く同じって訳じゃなくて……ううーん説明しづらいんですけど、毎日前日の夢の続きを見るような感じなんです、まるで夢の中での時間が続いているみたいに……」

藍はそんな曖昧な夢の話しを分かりやすく伝えようとしているの

か、頭に思い描くように目を閉じて話し続ける。

「それに……寝ているはずなのに眠れていないみたいなの？ やけにリアルな夢だからなのかな、ふと目が覚めても何だかずっと夢の中に居る感じで……」

「リアルって？ まさかウチの幹也ちゃんが夢の中にまでお邪魔してたかしら？ お熱いわねえ夢にまでなんて。幹也ちゃん、少しはあーちゃんを寝かしてあげたら？ 何事にも節度を持った方がいいわよ」

「……っていつかそれどんな振りだよ」

「幹也ちゃんがあーちゃんの夢に入った話」

「うちっていうのは何だよ、うちって……」

「幹也ちゃん冷たいのねえ……それでどんな夢だったの？」

「おいおい……」

どうやら俺は弄ばれたみたいだった。

「どんな……ううゝ何だろう？ 旅？ 一面砂しかない砂漠だったり緑と青の入り混じったすごく綺麗な森を見下ろしていたり、その森の中から降り注ぐお日様を見上げたり。夢のはずなのにやけにリアルで、綺麗だなゝとか嬉しいや寂しいって気持ちもまるで現実のように感じるんですよ」

そこまで言い終わるとゆっくりと目を開けて、何故か俺を呆然と

見つめてきた。ん？ 俺の顔になんかついてる？

「なに？」

「別になんでもないですよ。そっちこそさつきから沙耶の顔ばかり見ているじゃないですか」

沙耶ちゃんと視線が合い、俺はテレながらも話しをそらした。あたふたする俺に、沙耶ちゃんは微笑んでいた。

「ヤバイなこの微笑み……リミッターが振り切る寸前まで熱が上がってきた。妄想は膨らむばかりで俺の気持ちは、出会ったびにどんどん頂上に登り詰めていた。」

しかし何故なんだろう？ ここまで焦がれる理由が自分でもわからない、沙耶ちゃんより綺麗な女と付き合ったことはあるし、沙耶ちゃんみたいにガードの固い女性とも付き合ったこともある。

ただ彼女は、他の女性とは違う魅力があった。本能で生きる野性的な俺が行動できないことも理由の一つだった。

藍も他の女性とは違う魅力があるが、性格が難点だった。それを除けば可愛いと言える。んゝもつたいない。

「幹也ちゃん？ 藍の顔をそんなに見なくてもいつも間近で見ているでしょう、二人とも見つめ過ぎですよ」

からかうようにそう言われて我に帰ったときには、既に沙耶ちゃんはカクテルを飲み干して静かに席を立っていた。俺は「今度はゆつくりと3人で飲もうよ」と告げてビールを煽る。その言葉に沙耶ちゃんは、微笑みながら手を振って友人達の席に戻って行った。

沙耶ちゃんは俺にとって手に入らない宝石のような物で、手に入るつもりは更々ない。ただ見ていただけ……沙耶ちゃんの手が笑顔を隠せば、それだけで幸せを感じられた。

「さてと……もう結構いい時間ですね、そろそろ帰りますか？」

藍の言葉にふと時計に目をやると、既に午前二時を回っていた。

「やばい。もうとっくに電車ないじゃん！」

俺はわざとらしく驚いてみた。藍もそれをひそかに知っている。なぜならいつも電車に乗れないことを理由にして、泊まる理由をつけてはSEXを共有しているからだ。藍もまた流れのままにそれに付き合ってくれている。

「帰れないんだったら、もう一杯だけ飲んでいきましょうよ。どうせタクシー来るまで時間かかりますし！」

藍がいたずらな視線を投げてきた。

「俺マジで財布持ってきてないですから！ ごめんなさい泊めてあげてください！ お願いします藍様！」

答えは分かっているのだがなんとなくノリに任せて頼み込んだ。

「しょうがないですね、今日は泊めてあげますか」

いつもだけどね！ とは言わないでおく。

「じゃあギネスと」

「私はアラウンドザワールドで」

俺はギネスを手を取って、藍のカクテルを見た。それはきれいなエメラルドグリーンのカクテルだった。

「ちょっと飲ませてよ、そのカクテル」

「いやです」

くやしそうに顔をしかめる俺、うれしそうにジャレ合う二人、ほどなくして夜は更けていった。

雲一つ無い真つ青な空、辺り一面に広がる真つ青な海。

そんな青色一色の世界で、一際白く輝く太陽。

私は船の看板に寝転がり、のんびりとそれを眺めている。

隣には静かに寝息をたてている幹也。

そんな晴れやかな情景の中なのに……何故か私の心は陰鬱な気分が充たしている。

絶望的な現実の中の小さな希望、描いた理想を否定する実情、堂々巡りする考えが陰鬱な気分には拍車を掛ける。

今日までどれほどの時間をこうして過ごしてきただろうか、今日もまた……考える事に疲れきった私は……目を閉じて眠りに落ちた……

頭に靄が掛かっているようなぼんやりとした寝覚め、起き上がった時計を見るとアラームの時間の五分前。

起きて学校に行く準備を始めよう……と思う反面、ぼやけた頭とけだるい体起きる事を拒んでいる。昨日は珍しくも普段よりも早く寝たはずなのに、今の気分は飲み明かして酔った上に、一時間しか眠れなかった朝のようだった。

「なんでこんなに……」

夢見が悪いんだろう、と心の中で呟く。

深くため息をついて気持ちを切り替えアラームを解除、隣に眠る幹也を起こさないように準備を済ませていく。

いつからだろう、隣に幹也が居ない朝のほぅが少なくなったのは。毎日一緒に居るわけでもないし、お互いの生活のリズムもバラバラ。同棲どころか付き合っすらいらないものにも関らず、今となっては週の半分以上の夜を共に過ごしている。

「私は……何を」

……何を考えているんだろう、疑問に思った自分自身を疑問に思う。

また深くため息をついて、学校へ向かった。

午前の講義の間も一向に陰鬱な気分が晴れる事はなく、聞いているのに頭に入っていないと自分で感じるほどだった。仕方なく気分を変えようと、昼食の時間に違う講義に出ていた沙耶を誘って外に食べに行くことにした。

「あーちゃん今日はどうしたの？ やけにブルーじゃないの、もしかして幹也ちゃんと喧嘩でもしたの？」

そんな沙耶のいつも通りのふわふわとした笑顔と冗談めいた口調に、私は朝から引きずっていた陰鬱な気分が少しだけ癒される。

「別にそういうわけじゃないんですけど、今日はどうにも夢見が悪くて」

「あらあら、幹也ちゃんもアフターケアが足りないわねえ。寝る前に優しくするのは当然として、彼女が起きた時にもちゃんと気遣いを欠かさないのは男としての勤めよねえ」

何故か大前提が幹也と居た事になっている。当たってはいるんだけど、一緒に居るのが当然って思われてる節が節々に……

「いつも言いますが、幹也は彼氏じゃないですから。それとさも当然のように（する）の部分強調して言わないでくださいよ」

「はいはい、そうでしたね。でも肉体関係はあるんでしょう？」

「肉体関係って……なんか露骨過ぎて嫌な表現ですね」

「違った？」

「そうですけど」

「はつきりしないわねえ、好きなら好きで付き合えばいいのに」

付き合う……か、たしかに何度も考えた事はある。それでも幹也に対して一度も口にしたことのない言葉だった。

「それに、前々から聞きたかったんだけど、どうなったらそんな関係が始まるものなの？ しかも一年以上もずっと続いているんでしょう？ 私にはどうにも理解できないんだけど」

「……………」

どうやってと聞かれても、正直言葉にできない。仲良くなっていく内に二人でいるのが当たり前になって、次第に幹也に惹かれていく私がいる。私の部屋で二人で飲んでいる時に、なんとなくそんな空気になって……

誘ったのか誘われたのかは正直覚えていない。嬉しいながらも、

ありがちな展開だな〜って自分でも思ったことだけは覚えている。ただ、そうなった後に　どちらかその先にどうなるのかを、どうなりたいのかを、口にしなかったただけだった。

その日の翌朝もいつも通りに目を覚まして学校に行く準備を済ませ、寝ぼけている幹也に初めて部屋の鍵を預けて家を出た。

遅刻しないようにと急いでいたから、とくに話もしなかった。いや、私が話をしようとしなかったただけなんだろうと、今になって思う。

もしも幹也に、酔った勢いだつたと謝られたらと思うと……怖かったから。

「流れ任せにやっちゃって、そのままなし崩しに続いているってところかしら？　ありがちな〜って……あ〜ちゃん！　聞こえてる？」

少しの間ぼーっと考え込んでいたようだ。気がつくといつの間にか、沙耶が心配そうに私の顔を覗き込んでいる。

「あ〜うん、聞いている……って、えっ？　嘘、私今声に出てました！？」

あまりの事に驚いている私を見て、心配そうだったはずの沙耶の顔が呆れ顔に変わる。

「答えられないって事はそんなところかな〜って思ったただけだったけど？」

墓穴どころか完全に肯定してしまったようだ、とはいえほぼその通りなのだから否定のしようも無いんだけど。

「お互いに都合のいい関係って言えば聞こえはいいけど、要はいつ

でもしたいときにできる女ってことでしょ？ あーちゃんはそのでいいの？ まあ人恋しくなった時にいつでも相手してくれるわけだし悪くも無いのかしら」

「……………」

都合がいい か、多分その通りなんだろう。ただ一言、好きだと言葉にすることもしないままに、優しくしてくれる幹也に甘えてるだけ。だから未だに幹也が私をどう思っているのかも聞けずにいるんだから。

「…………ごめんなさい。茶化しただけのつもりだったんだけど、言い方がきつかったわね」

沙耶はそう言って、自分を責めるように目を伏せた。

「そんな事……無いですよ、沙耶の言うとおりですから。お互いに都合がいい関係、考えようによっては、それだけ相手を信頼してるからできる関係ですから。だから、十分に幸せなんだと思いますよ」

そんな心にも無い事を、自分で自分が馬鹿みたいに思う。

本当は何か関係を変えられるきっかけが起きないかと、自分から動く事もせずに臆病に待ち続けているだけなのに。

「信頼しているからできる関係か、それもそうね。お互いに相手に好意があるからそんな関係が成り立つってことなのね」

そんな沙耶の肯定的な解釈に何も言えず「それで幸せなんです」と言わんばかりの笑顔を顔に貼り付けて頷いてみせる。

「何だか悪かったわね、変な話になっちゃって。そういえばこの前東駅に美味しいケーキ屋を見つけたの、もうタルトが絶品なのよ、今から食べに行こうか？」

美味しいケーキ屋から新作の服など、次第に取り止めのない会話に戻りいつの間にか沈んでいた空気も消えていく。

ただ「お互いに好意があるから」という言葉だけが、そうであって欲しいという願いと共に私の心に重たく響いていた。

第一章 2 (幹也)

揺蕩う意思

照りつける太陽の下で、波にゆられて時を待つ。

隣にはいつもの女性がいた。

その微笑には幸福と安らぎが満ちていて、勿論、俺に与えてくれるものだった。

そつと肩を抱き寄せる。逃げる素振りは見せない彼女に、視線を合わせて唇に触れた。

やわらかな風が通り抜けたのち、顔を赤らめる俺と彼女、未だに踏み込めない心の壁が、透けて見えた。

それでも青い大空は祝福してくれているような気がした。

朝日の眩しさに目をゆつくり開くと、見慣れた天井が見えた。寝返りをしてもう一度目蓋を閉じるが、けたたましい携帯の音楽鳴り響く、うるさいな〜と思い時計に目をやると、出勤時間までのタイムリミットを指し示していた。

「ふあ〜もうこんな時間か」

布団を蹴り飛ばし寝ぼけた体を無理やり起こす「仕事に遅刻はしたくないだろ？」と自分に問いかけてモラルに負ける。仕方が無くベットから下りることにした。

台所に向かいインスタントコーヒーを手に取り、昨日洗ったカップに入れた。電気ポットのお湯を注ぐと湯気と一緒に漂う香りが、

目覚めの後押ししてくれた。冷蔵庫の扉を開きクリームを探したが見つからない。どうやら買い忘れていたみたいだ。

リクライニングの椅子に腰掛け、テレビのリモコンを操作すると流行の曲が流れた。タバコとクリームなしのコーヒーで少しの時間を満喫する。もう一度時計を見る、動きたくない気持ちを抱えながらもタバコを消し、コーヒーを飲み干して立ち上がった。

気合を入れた後、いつも通りシャワーを浴びて歯を磨き、スーツに着替え準備を終えた。

職場に向かう電車で揺られて出勤中、この間に小説を読むのが最近の日課だった。昔の俺からすればこんなこと考えられなかったけど、今では、趣味みたいなものになってしまった。というのも元々文字だけの本は好きではなく、絵がついているほうがめり込みやすかったが、無理やり進められて仕方が無く読んだら、意外と文字が苦手な俺ですら読めたのだった。

小説を読んでいる俺は好きだと言える。なぜなら、知的な人になったみたいだから、それに若いときは味わえないような大人の楽しみを感じた。

職場に着くといつも通りに仕事をした。時折、おとなしくて可愛い女の子が持つてくるお茶は、仕事の能率を上げてくれた。そのあと昼食を同じメンバーで、馴染みの定食屋に行つて、たわいも無い話で済ませる。そしてまたデスクに向かった。

しばらくしてあらかた自分の仕事を終わると、帰宅時間が過ぎていた。残業していたのだ。帰る支度を始める。

「あの〜幹也さん」

俺に呼びかけたのは、いつもお茶を差し出してくれる同僚、可愛い恵美さんだった。

「恵美さん疲れ様です。それにしてもこんな遅くまで職場に居たなんて、帰る時間とつくに過ぎていますよ」

「ええまあ……えつと」

恵美さんはもどかしそうにそわそわしていた。何かを言いたげだったが、こういった素振りに対する対応は苦手なので、聞き流すことにした。

「じゃあ帰りますので、お疲れさまです」鞆を持って席を立つ。

「ちょ、ちょっとまだ夕食終えてないですよね？」

恵美さんは目線を合わせない、人の目を見て話しなさい！ と言いたかったが、とりあえず心に留めておく。

「ん？ まだだよ、昨日開店した居酒屋があるから寄っていこうと思ってる、そこで夕飯と晩酌を済ませるつもりだよ」

「わっ私もお供していいですか？」顔を近づけられた。

お供って！ どこかの時代劇にでも出てくるような言葉だな。

「お供していいですよ、居酒屋でよければ」

恵美さんはテレながらも頷いた。

俺達は居酒屋に向かった。途中通りすがりの猿顔女性に目をやる。

ショートヘヤーに少しパーマを掛けていて奇抜なファッションしている。首にはマフラーでもタオルでもない大きな布を巻いていた。

「恵美さんも普段は、ああいう格好をするの？」

「あつあれですか？ がっ学生の頃はしていましたよ、流行の格好っていうより独自のスタイルをしたくて……その為に服を作る学校にも通っていましたし……」

「へえ〜そうなんだ、じゃあ今は？」

「え！ えっと〜」

恵美さんは困惑したように頭を悩ましていた。そんなに悩む事か？ と思いつつ待つが、一向に答えは出なかった。俺は苛立ちながらも話題を変えて恵美さんが話しやすいように工夫した。その為、当初に比べると恵美さんの緊張が解れたのか、笑顔が増え始めた。俺も気を使わずに話せるようになってきた頃、居酒屋に到着した。

さすがに新装開店の居酒屋は、帰宅途中のサラリーマンで多く賑わっていた。「いらっしやいませえええ！」活気の良い挨拶をされて、定員さんに二名と伝える。「座敷しかありませんがいいですか？」と聞かれ、承諾して席まで案内された。

上着を脱ぎ座敷に腰を下ろす、仕事で汗ばんだ黒靴下が異臭を漂わしていそうだったが、気にするつもりはない、それが俺の性格だからだ。「足くさいけど、勘弁して」俺は冗談で言う。

「大丈夫ですよ、私も臭いですから」

俺の冗談にもついてこれるようになった恵美さんは、職場でのおとなしそうな印象とは違って明るくなっていた。

俺達はさっそく飲みものを頼み、さっきまでの話を続ける。学生時代の事や職場の人間関係など話し、最近の恋愛事情にまで広がった。「彼女はいるんですか?」「彼女?」

昔は、彼女「セックスと考えていたが、この歳まで色々な経験をしてきた。その為【彼女】という意味があやふやになり、今では恋愛・恋・愛情・愛・などの思考は存在しない。

ただこれに含まれない【好き】はなんとなく分かるような気はした。大事にしたい者・大切にしたい者・離したくない者に対する思いとっている。しかし【者ではなく物】として捉えているのかもしれない為、人への感情ではないのかもしれないと思う。

俺の異性に対しての感情は未だに不明だ。

「いないけど」そう言ってビール口に含む。

「だったら! 立候補していいですか?」

明るく言い放った彼女に驚いて噴出した。普段の消極性と時折見せる積極性、どちらが本当の恵美さんなんだろうと悩み……

「ゴメン、今は断りたいな。まだお互いにわからないことだらけだし、もっと深めてからでもいいと思うよ」むせながら答えた。

「じゃあとりあえず今は、友達からってことですね」

「ちょっと違うと思うけど、まあ〜そういうことになるのかな?」

「私は、それで全然OKですよ。また飲みに誘ってくださいね」

恵美さんは明るく振舞っていてくれたが、お互いの心中はわからないまま、その後も楽しく会話が弾んだ。

酔っ払い始めた俺と恵美さんはぶつちやけ話に花が咲き、俺はビールを煽り始めた。

「こんなこと聞いていいのかわからないけど、俺なんかのどこがいの？」

「え！いきなりそんな質問ですか？ 答えれますけど恥ずかしいですね」

恵美さんは、照れながら俯く。

「性格ですよ、幹也さんって誰にでも親しく接してくれるじゃないですか、多分器が大きいってことだと思います。それになんか、いつもゆるくてほんわか性格に癒されます。あとは……考えていないようで考えているところかな？ なんだかんだ言っても頼れる人だと思っんです」

俺って他人から見るとそう見えるのか？ 普段自分のことを聞くこともないが、こうして聞いてみると、変な感じがする。俺は、ゆるいという表現を気に入って、恵美さんに花丸をあげた。

今更考えてみるけど、自分の性格で知っていることと言えば、何事にも気にしないってことだろうな……

気の遠くなるほどに長い長い時間を歩んできた
幾重にも苦労を重ね続けて歩んできた

それでも この瞬間に勝る苦しみは無かった

幾度と無く経験した別れの瞬間にも

これほどの悲しみを味わった事なんて

一度だって 無かつただろう。

私達にはどうすることもできなかった。

私達に唯一許された事は、その光景を目に焼き付け……

胸を締め付ける耐え切れない痛みを味わう事だけ

遙か天空から雲を割って輝く光の矢が

沙耶の体を引き裂いて大地を穿ち突き刺さる光景を

どうしようもなく見ていることしか……

私には できなかった

頭上から響く目覚ましの爆音に目を覚まし、寝ぼけながらも
腕を伸ばして静けさを取り戻す。

「……………あゝもう！ 消すの忘れてた」

今日は学校も無い週末の休み。普段なら前夜のうちに目覚ましを
解除して、のんびりとした休日が始まるようにしているはずなのに
……………前日の大学の飲み会の疲れでそのままベッドに入ってしまった
事を今更ながらに後悔する。

休日とはいえ予定は入っていないのに、通学時間に合わせた目覚ましの針は午前六時。体の気だるさに任せて寝直すことに決めて布団に潜り込む。が、爆音で目覚めてしまった頭が睡魔を追いやってしまう。

仕方なく携帯に手を伸ばしてリダイヤルを開く。長考の末、前歴五件の内の三件を占めるアドレスに電話を掛けた。

寝てる……かな？ 耳に残る無機質なコール音が二分ほど続いてやっと繋がった。

「……………」

繋がっているはずなのに無言のまま、なんとなく悪い気がして小声になる。

「おはよ……沙耶？」

「……私の記憶が間違っただけなら、今日は確か日曜日だったと思うけど？」

「さすが沙耶！ 大正解です。寝起きなのに絶好調ですね！」

プーツーツー

切られたようだ。無機質な音が耳元でこだまする。

前歴五件中の四件となったアドレスに再度掛け直す。これでついに前歴五件を占領！ と心の中でガッツポーズ、

「これは新手のいじめなのかしら？ だとしたら受けて立つわよ」

……そこでやっと、親友を早起きの巻き添えにする行動に何故か浮かれていた自分に気づき、再三謝った上で何とか買物の約束ま

で取り付けた。

「毎回は嫌だけど、たまにはこんな早い時間の買い物つてのもいいものね。どこのショップもまだ込むには早い時間だから、選びやすく助かるわ」

行きつけの店を開店時間に合わせて巡り、三十分足らずで既に三件目。気に入った服が一つあるとすぐにそれに合わせて全身一式買い揃えてしまうという、とても大学生の買い物とは思えない沙耶の大人買い。いったいどこからそんなお金が出てくるんだろうということも疑問に思う。

私は特に何か買いたいものがあつたわけじゃなく、単純に暇つぶしのつもりだったのに……何故かいつの間にか、傍から見れば沙耶の買い物に付き合わされる荷物持ちさんにしか見えない構図。

「ちょっと来てなかったうちにこんなにいい感じの新作が増えてるなんて思わなかったわ、事前に分かってれば車持つてる友達を連れてきたのに」

「車って、そんな子学校に居ましたっけ？」

思いつく限りの友人には自分の車を持っている子なんて一人としていなかったし、そもそも大学に通うのに禁止されている車をわざわざたまの休みのために買おうなんて誰も思わないだろう。

「学校の子じゃないわよ、ひよんな事で知り合って仲良くなった人なの。車も持つてるしニートだからいつも暇してるし、用事があるときはなんだかんだ手を借りてるのよ」

「……ご愁傷様ですね」

「どういう意味よ、無理やりって訳じゃないんだから何も悪い事なんてないじゃないの。ニートもたまには日の光を浴びないと体に悪いじゃない、用事を作って連れ出してあげるんだから感謝して欲しいくらいだわ」

そう言っただけでも気にするそぶりも無く別の売り場へと流れていく沙耶。大量の荷物と共に置いてきぼりの私自身がそのニート君の事情と重なっていると思うと、思わず心の中で手を合わせてご苦労様、と言いたくなる。

それにしても、沙耶から男の人の話題が出るのは珍しい気が…
…野次馬心というほどでもないけど、いつも幹也の事で一方的にいじられている身としては反撃の狼煙が上がるような気配が

「あーちゃん。何やってるのよ、ぼーっとしてないで次の店にいきましょー」

考え込んでいるうちにいつの間にか新たな買い物袋を抱えて沙耶が目の前にいた。考えている事がばれるはずも無いのに、思わず動揺を取り繕う体裁になってしまう。

「はーい、ってまだ買っんですか!？」

既に二人で持っているにも関わらず腕が吊りそうになるほどの量、ちなみに私の買った物といえばプリントTシャツ二枚のみ。

「大丈夫、今さっきニート君に来るように言っただけだから、安心していいわよ」

「……ご愁傷様です」

ともあれそんな気軽に呼び出せる関係って事はやっぱり彼氏なんだろうか、つついてみたい気持ちがあるが頭をもたげる。

どう切り出したものかと考えながら、重たい荷物を抱えて国道沿いを歩いて五分ほどの位置にある革物専門店に向かって行く最中

目的の店の看板が見えてきた頃、後ろの方で突然クラクションが鳴り響いた。驚いて振り向いた私達を通り過ぎて、真っ黒なワンボックスの軽自動車が路肩に駐車する。

「いいタイミングね、ちょっと待ってて」

沙耶はそう言って私の持っていた荷物を受け取ると、引きずるようにして車に向かって行くと、あたかも自分の車だともいうように、そのまま運転手に挨拶もなくトランクに荷物を積み込んでいった。

当の運転手も出てきて手伝うわけでもなく、運転席でタバコを吸ったまま積み終わるのを待っている。顔は死角になっていて見えないうが、運転席の窓から出ている細腕とその細腕に似合う細身の腕輪と細長いタバコ。なんとなく綺麗系で細身の体系を思い浮かべる。

どんな人なんだろう……と興味本位で近づこうとした時、青信号に進み始めたトラックに反射した光が、私の目を一瞬眩ませた。

ただそれだけの出来事が、今朝の嫌な夢を思い出させる。目が眩むほどに輝く光の柱を、それに貫かれる沙耶の姿を

ここ最近続けざまに見る嫌な夢、ありえるはずも無い非現実的な夢の数々……そんな夢の中の出来事の、とびきり嫌なワンシーン。

(こんな事、悩むようなことじゃない……多分ちょっと疲れてるだけなんだ……)

自分にそう言い聞かせながら、それでも背筋を伝う寒気に震える身体をじっと押さえ込んだ。嫌な想像が頭を掠めないように、ただ必死に

「……ちゃん、……あーちゃん！」

ふいに肩をぽんと叩かれ驚いて顔を上げると、いつの間に戻ってきたのか目の前に沙耶がいた。疑惑の彼も既に帰ってしまった後のようなのだ。

「もう、さつきからぼけーっとしすぎよ？ 折角の休みの日に早起きなんてするから寝ぼけちゃった？」

相変わらずの冗談めかした口調とほんわかとした笑顔に、身体を縛っていた緊張が解けいくのを感じる。

ゆっくりと、少しだけ深く息を吐き出して、私も冗談めかして言葉を返す。

「眠いです〜って言っても、どうせまだまだ付き合わせるんじゃないですか」

よくわかってるじゃない。とにんまりと笑う沙耶に、私も思わず笑顔が零れた。

青空と見渡すばかりの草原、いつも隣にいる彼女。

手を握り合いスローモーションのように時は進む。

にじむ汗と伝わるぬくもり、しっかりと握った手は二度と離さない心の表れだった。

本当に笑顔の君は綺麗すぎる。一度見てしまうと前が見えなくなりつまずきそうになってしまう……

ああなんていい夢なんだ、覚めないでくれ！

このまま死ぬまでここに居たい、彼女を見ていたい、俺は願った。遠くの方にもう一人の女性、多分こちらを見ている。

顔はぼやけて確認できないけれど、寂しそうな気持ちが伝わってきた。

そこで夢は途切れた。

「ふわ～あ、おはよ～寝みい～とりあえずコーヒー入れてよ～もちろん砂糖なしのクリーム入りで～」

藍に言わせると俺の寝起きは若干若返るらしい。

「私は幹也のお母さんじゃないんですから、自分でやってくださいよ」

「布団から出たくないんだよ、たのむわ～」

俺は子供っぽく言っておねだりをしてみた。自分ではかなり気持ち悪いと思うが、意外と好評みたいで大抵は通る。俺は童顔だからこれが通じるらしい……

「とにかく私は学校に行つて来るからいつものように鍵はポストに入れておいてくださいね。それじゃあ行つてきます」

藍は白のスニーカーを履き、急ぎ足で玄関を出て行った。それもそのはず時計を見ると十時を回っている。藍は既に遅刻していたようだ。っていつか俺も。

「やべえ遅刻した！」とりあえず焦りを声にしてみた。

俺は遅刻しているのにも構わず、シャワーを浴びることにした。人の家で勝手にシャワーを使うのはどうなのかとも思ったが、思い当たったら即行動するのが俺だから仕方が無い

勝手にシャワーを浴びて、勝手に他人のタオルで体を拭く、勝手にドライヤーを借りて、昨日の服を着て一息ついた。俺は台所に向かい、インスタントコーヒーを見つめる。そして、やかんを探した。

「藍の奴、やかんどこに隠したんだ？」

ベッドに戻り、携帯で藍をコールする。

流行の音楽が流れ藍を呼び出し中……

「プツ　留守番電話サービスに接続します……合図が」

「あいっ……」

仕方が無いので、カレー用の大鍋に水を入れ沸かす事にした。しばらくして俺は、砂糖なしコーヒーを片手にベランダに向かった。この部屋ではタバコを吸えない為、毎回ベランダで吸う事になっている。この前買ったアウトドア用の椅子に腰掛け、朝の風に酔いしれながらタバコを吸った。祝福の時を満喫する。俺は少しだけゆっくりして、待ち合わせ場所に向かった。

二十分後、待ち合わせ時間よりもかなり遅くなったにもかかわらず、タケの車はそこにあつた。

「タケ！ 遅くなってゴメン寝坊した」

「ういゝ、まあどうせそんなところだろうと思ってマンガ喫茶で時間つぶしてたから別にいいよお」

こいつが武人、いつも寝ぼけた感じの変わった男だ。こいつは人間観察が好きなようで、常に第三者の視点で物事を見る、そんな変わり者だ。

「今日はどうする？ タケの家でゲームでもするか？」

「いいよお」

「即答かよ！」俺は予想外の即答に軽くツツコミを入れた。

武人は俺と同じように細かい事を気にしない性格でマイペースだ。

「今日発売の新しいゲーム買ったからやってみるう？ アクションゲームなんだけどお、最近CMで流れているやつだよお」

タケの家は電気街の雑居ビルの中にある。立地がいいからの理由だけでテナント用のただっ広いスペースを買い取って、シャワールームなどを無理やり増設した、無駄に金のかかっている割には雑な造りの部屋だ。しかも十二畳もあるリビングスペースにはパソコンやテレビなどの電化製品の他には、ベッドとソファとパソコン用の椅子があるだけ、明らかにスペースを持て余している。その空いたスペースにある物が雑多なゴミだけなのだからなんとももったいないとしか思えない。

その上顔立ちは整っているのにこの浮世離れた二トつぷり、自分が必要とする物以外まるでどうでもいい、そんな仙人のような感覚と人を寄せ付けない空気が往々してこいつのもったいなさを実感立させている。知り合って早二年半になるが、未だにどうにも掴めない奴だ。そんなタケの部屋のソファに座り込み、とりあえずとゲームを起動した。

淡々とゲームを進めていく、さすがは新発売、新しいシステムがなかなか斬新で面白い。とはいえせつかくの休みをゲームで使い果たすのもなんとなく気が引けたが、まあいい……面白いことにはかわりない、俺は楽しくゲームを満喫した。

「それにしても今日はやけに機嫌がいいねえ、何かいい事でもあったのかい？ この新作を発売日に出来るからってえ」

「お前と一緒にすんなって！ まあゲームは楽しいんだけど 今日は夢見が良くてね。スゲーかわいい女と、見たこともないような綺麗な草原でデートしてる夢。かなり苦労してやっとたどり着いたんだって気持ち溢れてきてもう朝っぱらから気分は絶頂だったってわけ！」

妄想に浸りコントローラーを手放しそうになった。

「ほ〜それはそれは幸せなことだ。まさかそれ、前にあったあのメ
ガネの子？ 名前なんだっけ？ ああ沙耶ちゃん。前一緒に飲み
行ったときに居た子だよ。綺麗だったからねえ。つっても幹やん、
夢の気分そのまま持ってこれるなんて、なかなかいい才能持ってる
ねえ。普通は目が覚めたら大体忘れちゃってるもんだけどお」

「だよ。……でも、スゲー幸せを本当に実感したんだ。本当にそ
こに自分がいたってリアルに感じるんだよ、最近そんな夢ばかり
見るから寝るのが楽しくてね」

「自然な不自然ってわけねえ。まあそれが楽しめてんなら良い事な
のかもねえ」興味がなさげな目だ。

「毎回言ってるけど、お前の言ってること意味不明……」

日が傾き始めた時間帯になっても、俺達は昼飯を食べることも忘
れて新作ゲーム未だに没頭していた。

「そういえばこんな話は知ってるかなあ？ 魔術師が使う呪いの中
でもっとも単純でポピュラーなものだけど まあ知らないにして
も目の当たりにしたことはあるはずだけど、簡単すぎて知らないう
ちに使ってる人も多いしねえ」

タケの唐突の質問に、コントローラーを見握り締めながら考えた。

「そんなんじゃ使われてても気づかないんじゃない？ それになん
か効き目薄そうだし」

「知ってる人から見たらあんがい効果抜群なんだけどねえ、種さえ知ってればあんがい納得すると思うけど」

「もったいぶらずに教えろって」

「ホントに簡単だよお、ただ単純に繰り返すだけえ、言葉にせよ行動にせよひたすらに淡々と繰り返す、ただそれだけえ」

「それだけ？」

俺はあまりに簡単な答えに拍子抜けして、画面からタケに視線を向ける。

「そうだよお、簡単でしょ？　でも考えてみれば案外身近で起きてんだよお、例えば『誰々さんの好きでしょ』って言われ続けると、その内にその相手を気になりだす、まあ実際は言われ続けて意識してしまうのが故の勘違いなんだろうけどお、そんな例は結構あるでしょ？」

……そういえば中学生ぐらいの時代にそんなこともあったかも？

「あと分かりやすいのは、スポーツかなあ。足が早くなりたいとひたすらに想って練習をしている人は、そのうち自分のリミッターを外せられるようになって早く走れるようになる場合がある。もちろん体を守るためのリミッターを外すんだから自分自身に呪いをかけているってこと。後はミサंगाとかも有名かなあ」

やばい、こいつ人の努力全否定！　マジで根暗な奴。人の努力を呪いと一緒にするなよ………と思ったが、タケの性格を知っている上で、このことは心に留めておいた。

「ミサンガは違つだろ、あれはただのおまじないだろ？」

「逆に聞くけどお呪いと呪い、どこがどう違つのお？ 他人ないし自分に影響を与えたいって点ではまるで変わんないよお、可愛く言つているかどうかただそれだけだろお」

可愛いかは別としてもそう言われると納得できなくもない。

「まあそんなだからもしかしたら、同じような夢を見続けるって事にも何かの意味が有るのかもねえって思ったただだよお」

「なるほど。その話に繋がるわけね、っていつても所詮は夢だろ？ 大した事ねえよ、ああ！ そんな話してたら死んじまつたじゃねーか。しかもセーブしてねえ！」

「ああああ残念、まあリセットして最初からやり直すんだねえ」

「また最初からかよ」

「まあそれがゲームですから、今度は頑張つていこうねえ」

笑つ武人にしかめつ面を返して、俺はリセットボタンへ指を伸ばした。

浄化された空気が私の肺を満たす。

辺りには何百年何千年という時を生きてきた数々の木々が立ち並び、神聖な空気を作り出していた。

見上げる空に青はなく、生い茂った葉が影を落とし、隙間から日の光が幾重にも射し込んでいた。

そんな森の中を幹也と共に走り抜けていく。

はるか先に見える漆黒の塔、あの場所に早く辿り付かなければならないと、ただ黙々と走り続ける。

行く手に何匹もの化け物が現れては私達に襲い掛かってくる、それを幹也が目もくれず斬り払い、一瞬の間も置かずに走り続ける。

私もそれに続いて敵を払いのけ走り出す、ふいに左腕に痛みがはしる。攻撃を完全に防ぎきれてはいないようだ、だが……気にしている暇は無い。もう少しで辿り着く

そこで世界が白く染まった。

ベッドの中で目を見開く。急がなければいけないと焦りながら、辺りの様子を伺う。

そこでふと違和感を覚える。

「……は……? 敵は？」

自分の部屋のベッドの上、隣にはにやけた顔で眠っている幹也、だんだんと頭が整理されて冷静になってくる。

「まったく敵って、また訳の分からない夢なんだから」

起き上がるうとして妙に左腕が痛む事に気づいた。左腕って、さっきの夢？ でもそんなはずは 突然枕元の携帯が鳴り出す。

沙耶からのメール、内容は 「春眠暁を覚えず」……真冬ですけど？

時計を見ると十時過ぎ……

「やばい遅刻！」

飛び起きて準備していると、寝ボケ気味の幹也からいつも通りのコーヒーのオーダー。それを適当にあしらって急いで学校に向かった。

学校に着いたのは講義も半ばを過ぎた頃、しかたなく教室の後方の扉からこそこそと侵入して空いている席を探す。

沙耶が同じ講義だったらいつも席を確保してくれているのだけど残念ながら今日は別々。丁度空いていた顔見知り程度の女の子の隣に座り、恥を忍んで事情を説明してノートを写させてもらう。

やっと講義中の内容に追いついた頃、教室に一限終了のベルが鳴り響く。慌てていた気持ちもやっと落ち着いて一息、左手で頬杖を突こうとして 左手に小さな痛みが走った。

痺れる程度のほんの小さな痛み、どこかでぶつけた……かな？

漠然と出来事を思い起こして 思い至る。

リアル（現実的）な夢の、現実^{リアル}への影響。そんな馬鹿げた話なんてありえるはずもないけど、確かに腕の痛みは残っている。これまでに何回も見てきたリアルな夢だったけど、この左腕の痛み……夢

と現実が一緒になってきている？

だとしたら……もしも夢の中で私が死んだら？ 幹也がいなくなったら？ もしくは沙耶が

「……………っ！」

ありえるはずがない　そう思いながらも、逸る気持ちは止められない。いつの間にか荷物を投げ出して教室を飛び出し、沙耶を探して学校の廊下を全力で走る。人とぶつかりそうになりながらも、誰かに後ろの方から怒鳴られても気にもとめない。

以前の夢、沙耶が光に胸を貫かれる恐ろしい夢、もしも今日の夢と同じことが起きるのならば沙耶の身に

「沙耶！」私は周囲の目も気にせず、大声で叫んだ。

直後、誰かにぶつかって足が止まる。

「痛つつう、もう危ないじゃないの！」

「……………さや？ ………………沙耶！」

私は床に膝を崩すと、涙がこみ上げてきて子供のように泣きじゃくった。痛みを帯びた夢と現実、沙耶が死んでしまう悲しい夢。もしも同じことが起きたのなら、私の心はあまりの痛みに潰れてしまおうのだろう。

何も起きていない、至って日常通りな事が、こんなに嬉しいなんて思わなかった。今目の前にいるのは紛れもなく沙耶だ。これが現実、本当に良かった……

沙耶は困った顔で私を見る、頭の中には疑問がいつぱいだったと思う、

「どうしたのよ？ あーちゃん」

それでも沙耶はお母さんのように微笑みながら私の頭を撫でてくれた。普段と変わらない沙耶が目の前にいる、沙耶の手の温もりを感じる、沙耶の声が聞こえる。私の心を押しつぶしていた暗い思考が少しずつ消えていった。

もう二度と夢なんて見たくない！ それでも、どうしたらいいのかなんてわからない。

夢の中で沙耶に起こったことを伝えるわけにはいかない。それでも、不安の拭いきれない今日の夢のこともある。それ

纏まらない思考の中……今日の夢だけは沙耶に話すことに決めた。

「沙耶、今日空いてる？ 話したいことがあるんだけど……」

私はうつむきながら聞いた。

「いいよ。帰りにパフェでも食べながらねっ」

沙耶は笑顔で答えてくれた。何も質問をしようとしなかった沙耶は、いつもにまして大人びていた。立ち上がってお尻についたホコリを軽くはらう。

「それじゃ、今日は私の方が早く終わると思うから、いつもの店で待っているわね」

沙耶はそう言って手を振りながら、教室に戻って行った。

憂鬱な一日が終わった。授業の内容なんてまるで頭に入らず、一

日中あの夢のことを考えて過ごしていた。左腕の痛み、目が覚めても残っている感覚と感情。どれだけ考えても答えなんか出ないことは分かっているのに、どうしても頭の中から離れなかった。

就業のベルが鳴り教室の中がざわめきだす。気だるい体を起こし沙耶の待つカフェに向かった。

「お待たせ沙耶」

奥の席で物静かにアイスコーヒーを飲んでいる沙耶の向かいに座る。

「あら早かったじゃない、そんなに急がなくてもいいのに。それともこの後に幹也ちゃんとデートの予定でも入ってた？」

いつも通りの沙耶の冗談に、肩の力が抜けて行くのが分かる。

「今日を入れてませんから！ え〜っとカプチーノを一つ」

可愛い制服に似合わず、早く注文しろと聞こえてきそうな視線の定員をあしらう。

「一緒にフィナンシェをお願い、あとあーちゃんは何か甘いものはいいの？ 疲れてる時にはやっぱり甘いものをいっぱい食べた方がいいでしょ。デラックスパフェを一つ、以上でいいわ」

「……それ誰が食べるんですか？」

「誰って？ なに言ってるの、あーちゃん以外いないじゃない？」

「ですよね……」

ため息を一つ。デラックスパフェとはこのカフェの名物で、およそ罰ゲームか祝い事の時にしかお目に掛からないような、二、三人前の巨大パフェである。

半ば固まっている私の目の前に、フルーツ山盛りのパフェが運ばれてくる。

「それで？ 今日は何をそんなに急いでたの？」

……目の前のパフェと沙耶のほんわかとした空気がなんともいえず、今日の自分のシリアスな空気がなんだか馬鹿らしく思えてきた。

「また前に言ってた悪い夢でも見た？ 今日朝から疲れた顔していたし」

「正解です。と言っても……どこから説明していったらいいかわからないんですけど、今日の夢はいつもと違って、いつもなら夢を覚えているだけなのに今日は夢を体感しているってどういうか……」

「体感？ 前にも夢と感覚を共有してたみたいな事言っていたけど、それとは違うの？」

「うまく言えないんですけど、今日の夢は変な化け物と戦っているような夢だったんです」

「へえ、何かカッコイイわねえ、それで？」

「戦いの最中でちょっとなんですけど、左手に怪我をしたんです。そのすぐあとに夢から覚めたんですけど、まだどこかに敵が居る気がしてすごく動揺して……」

「まあ悪い夢を見た後はよく手に汗握ってるってのは聞いた事あるけど、そういうのとは違うの?」

茶化すわけでもなくいたって普段通りの沙耶の反応、無理もないと思いつつも私は首を振って否定する。

「すぐに夢なんだって分かってきて気にせず学校に行く準備をしようとしたんですけど、ベッドから起きるときにやけに左腕が痛んで……」

「傷はあったの?」

「傷は無いんですけど、いまだに違和感が消えないんです……」

話しているうちに体に寒気が走る。恐らく目の前のどれだけ食べ物でも減っている気のしないパフェが原因ではないと思う。

「それで今日私の所に走って来たって事は、まさかと思うけど私もその夢に登場してるってことなのかな?」

さらりと何のこともない平坦な口調で、要点を確実に射抜いてくる。私は戸惑いつつも朝からあんなに慌てふためいた様を見せてしまった以上、聡い沙耶相手に隠しきれはるはずもないことだったと諦める。

「……正直あんまり言いたくなかったんです。でも、もしも沙耶や他の人にも影響が出てきたらって」

私は泣き出ししてしまいそうになって思わず言葉を切った。そんな

私を気にも留めず、沙耶は相変わらずのほんわかとした空気のまま口を開いた。

「それで？ 夢の中の私はちゃんと活躍していたのかしら？」

「　　っ！」

私は叫び出しそうになるのを堪えて全力で目の前のパフェをやけ食いする。

「ごめんなさい。茶化した訳じゃないのよ、ただちょっと気になっただけ！ もうそんなに炸裂しないで落ち着いてちょうだい」

困ったような申し訳なさそうな笑顔で沙耶がなだめてくる。それでもなんとなく駄々をこねる子供のような感情が収まらず、山盛りのアイス的沙耶のグラスに沈めてみた。

「あら、なかなか美味しそうね」

「　　っ！」

気にもとめずに飲みはじめる沙耶を見てまたやけ食い。

「あらあら、もう本当にごめんなさいね、つい面白くって。それにしてももうこんな時間なのね？ 私そろそろ行かなくちゃ、今日は奢ってあげるからそんなに急いで食べずにゆっくり堪能してあげてよ」

答えも聞かずに席を立ってしまう沙耶。どうにも煮え切らない気持ちを抱えたまま、それでも他人にはどうすることもできない夢の

話では仕方がないんだろうと思ひ直し、しかたなくアイスで一杯の口を押さえて沙耶に手を振る。

「それじゃねーあーちゃん、いつかまた……夢の中で待っているわ」

「……………?」

口の中が空いた頃、既に沙耶は店を後にしていた。

沙耶の言葉がベッドに入るこの時まで頭から消えず、いつまでも気になって私は眠ろうにも眠れなかった。

誰かと一緒にいれば、少しでも気がまぎれてくれるかな……と、こんな時に頼れる相手がいる事を、私は何よりも幸せに思う。

あくまでも幹也は彼氏ではない、それでも関係を持つ事を私は嫌だと思ったことはなかった。幹也のことが嫌いな訳ではないし、ここまで自然に一緒にいられる相手はなかなか探しても見つからないだろう。他人から見れば都合のいいだけの関係でも、付き合ってしまったっていつか壊れてしまうよりも、今はただ一緒に居られる時間を大切にしていたかった。

「さすがに寝てるかな」

携帯からは呼び出し音だけが延々と聞こえてくる。

諦めようかと思ったその時、眠そうな声が聞こえてきた。

「おはよ〜、藍。それじゃあお休み〜」

「お〜い！ 起きてくださいよ。大変なんですよ!」

電話越しに幹也が少し驚いたのが伝わる。

「……どうした？」

いきなりの事で目が覚めたのか真剣な声で聞いてくる。

「大変なんです……私、眠れなくて!」

プツーツーツー、……切られた様だ。

無機質な音が耳元でこだまする。迷わずリダイヤル。

「ちよつとく、いきなり切るなんて酷いですよ！ 話ぐらい聞いてあげるのが優しさつてもものだと思いますよ！」

「その様子だと俺を眠らせてくれる優しさは無いようだね……それで？ どうしたんだ、こんな夜更けに。んゝもう十時回ってんじやん」

「まだ十時ですよ！ 起きたならとりあえず集合です。まだこの時間なら電車動いてますから！ 待ってますねっ」

すかさず電話を切って、布団に包まり丸くなる。今日も眠ってしまったらあの夢の続きを見てしまうのではないかと不安になる。幹也はあくまでも夢なんだから気にするなと言ってくれるけど、知らない場所にもう一人の自分が立っているような感覚、どうしても眠るのが怖くなる。それに今日の沙耶の言葉 夢の中で待っているわ

あれはどういう意味だったんだろう、いつもの冗談だったのかな？ 十数分もたっただろうか、玄関の呼び鈴が鳴る。なんだか体が疲れて力が入らない。緩慢な動きで玄関へ向かう。

「いらつしやいませゝ幹也」

「まったく、こんな時間にいきなり……っておい、聞いている？」

幹也の愚痴を聞き流し、手を取って部屋に入れる。そのまま手を引いて幹也をベッドの辺りに放り投げる。

「ちよっつつっおい！」

バランスを失った幹也が意味不明な悲鳴と共にベッドの上に潰れる。そんな幹也を押し潰すように上から抱きつき、そのまま幹也の背中に顔をうずめる……

「で？ この体勢でストップされて俺はどうすればいいんだ？」

「……うるさいです」

独り言のように呟いて、そのまま力を抜いていく。幹也はどう対応していいか分からず、あっけに取られているようだ。

「何から話していいのか分からないんです」

「じゃあとりあえず、俺を呼んだ理由から聞こうか？」

答えの代わりにとりあえず幹也のわき腹を全力で殴っておく。

「うっ……何すんだよ！ 今日のカレーが出るところだったじゃねえか！」

「バカ！ 人のベッドを汚さないでくださいよ〜！」

本当に出ていないのを確認して少し安心する。

「おいおい……話し戻すけど、どうせ例の夢物語の悩みなんだろう？」

幹也は呆れた様子で話を戻し、ふてくされるようにうなだれた。

「それはそうなんですけど……」

話すべきなんだろうが、幹也も夢に出てきているのだから、もしかしたらまた昨日の夢のような事が起きないともいえない。

「おい！ 寝たのか？ もしも〜し」

とりあえずもう一発わき腹にいれておく。

「昨日の夢はいつもと違って変だったんですよ。いつも変な夢なんだけど、昨日は特に変わってて」

「とりあえず俺から降りろよ、話を聞いてやるから」

なんとなくもう一発だけわき腹に入れて、幹也の横に転がる。

「うっ……またかよ〜」

「夢の中で怪我をしたんです」

「あのな〜今怪我をしてんのは俺だぞ、しかも三発も……」

幹也は右のわき腹をさすりながら言った。

「んで、怪我がどうしたんだ？」

なんとなくもう一発入れようと構えて思いとどまる。どっちらちゃっと聞く気になってくれたようだ。

「……夢の中で怪我をして、起きたときに同じ所が痛かったんですよ。これっておかしくないですか？」

「藍の頭が？」

もう一発入れないと直らないようだ。でもパンチじゃ弱すぎる！上半身だけ起こして上からエルボーを落としてみた。

「これでどうですか！ 茶化さないで、真面目に聞いてくださいよ！ 頭じゃなくて左腕！ 左う・で・！」

熱くなりすぎて、涙目になったまま。幹也を睨みつける。

「イテテテ……悪かったよ。んで、傷はあつたのかよ？」

「ないわよ、でも夢と同じところが痛くなるのはおかしいでしょ、リアルに感じるのは、まだ分かるけど、痛みまで一緒なら夢に起きる事が怖くなって眠れないじゃない！」

「まあ、たしかにそういうことなら分からなくもないけど、それは悪い夢だからだろ？ 俺なんか良い夢ばかり見てるから、同じ事もし起きたなら嬉しいけどね」

「その夢に沙耶も幹也も出てくるから怖いの！ もし幹也や沙耶に何か起きたら 私どうすればいいの……？」

「また一発もらいたくないから、真面目に話すけど。俺も最近リアルに感じる夢をよく見るんだ、俺の親友が言ってたけど、そういう夢には何か意味があるかもねってね」

「意味……か、もぉ~~~~~訳わかんないです！ 何でこんな夢なんかで悩まなくちゃならないんですか！」

本日大活躍のサンドバックをがむしゃらに叩く。

「イテテテ……わかった！ こうしよう、おまえ先に寝ろ、起きて見ていてやるから」

そう言われて、途端に気恥ずかしくなって顔を伏せる。

「うう〜ちゃんとうなされてたら起こしてくださいよ」

「わかったからもう叩くな、約束するよ。アイの寝顔眺めてやるから、安心して寝なよ」

「なんかそれもイヤ」

そう言いながら幹也の胸に頭をぶつけ、しがみつくようにして力を抜く。

「今日はごめん、おやすみなさい……」

体から緊張が抜け、そのまま眠りに落ちていった。

「またこんな体勢で止まるのかよ、俺はどうしたらいいんだ……ったく襲っちまうぞ」

第二章 1 (沙耶)

導く者

やっとここまで来た

夢に少しずつ少しずつ侵食していく二人を見届け
見つけたことも遅かったために苛立ちが募っていた

こんな失態が私に許されるはずはない

私に残されたタイムリミットはもう間じか迫っている
そんな苦労もやっともう少しで終わるのだから

あーちゃんと別れ夕暮れ時のカフェを後にした私は、その足で電
気街にある鬱蒼としたBARに向かった。店に待たせていた友人に
声をかけ、私はマティーニを注文して席につく。

「待たせたかしら？」

「いいええ、今来たところですよ。ああどうぞお」

そう言つて武人は向かいの席を促してくれた。

「藍ちゃんの様子はどうでしたあ？」

「正直……かなり参ってるみたいね、最近はずっと情緒不安定気味
だったし、今日も相当悩んでいたから」

「あらあらあ、それはまたかなりのマイナスの要素があるみたいだねえ」

「幹也ちゃんの方は間に合いそうなの？」

「夢の話はプラスの傾向が多いみたいだねえ、少々遅れたけど既に事を起こすには十分な状態だろうよお？ それにしてもあの幹やんをあそこまで惚れさせるとは、一体どんな小細工をしたんだい？」

「あら、小細工なんて失礼ね？ 私はべつに何もしていないわ、普通に接してるだけよ。あるとすれば私の美貌が強すぎたのかしら？」

そう言つて私は届いたマティーニに口をつけオリーブを齧つた。

「まあそうしておこうかあ。それでも沙耶ちゃんに惚れてるってよりも、ただ憧れてるだけに見えなくもないけどお、まあなんにせよ結果的にはそれはそれでよかつたのかもねえ、寝取つたみたいな印象じゃあ藍ちゃんと居辛くなるだろお？」

武人はお酒を煽り挑発的な視線を投げてきた。

「別に気にしないわ、二人はあくまで恋人関係じゃないわけだし。私も彼のことそんなに嫌いじゃないから、一度は味見してみたいわね」

挑発的な視線を投げ返す。

「あらあら、お熱いことで。まあ幹やんの様子だとなかなかそれも難しそうな気もするけどねえ。代わりに俺で良ければいつでも味見

「させてあげますよお」

武人はそう言つて、余裕な表情を見せる。

「悪いけど、私強い男が好きなの……多分彼はあなたより強くなると思うから。それに、女は知識はあつても力が無い男は嫌なものでしょ?」

「俺よりも……ねえ、確かに幹やんの能力というか才能とでもいうのか、俺が時折驚かされるほどのもんだからあ期待はできるねえ。ただ あれは解き放つのにかなりの苦勞がいるだろうけどお。まあ俺も幹やんも力がどっちの方が上なんか比べた事無いから、ベツドの上で沙耶ちゃんが比べてみなよお。意外な結果かもよお」

「それなら能力が備わるまでは比べようがないから、それまでは預けてところね。あなたがそれを証明したかつたら頑張つて幹也ちゃんの能力を引き出してちょうだい」

それを聞いた武人は、参つたとばかりに破顔した。

「いやはや、沙耶ちゃんにはかなわないねえ。まあこの件に関しては何年来の先輩ですから、ちゃんと後輩の面倒は見させてもらいますともお。あいつらよりもかなり早くから力をもらつてるわけだし、概要も一応程度には聞いてるからねえ。二人に比べれば心持がまるで違うしねえ。でもまあ知つての通りのこの性格なものでねえ、表立つて引つ張る事は期待しないでくれよお」

「わかつてるわよ、あなたの性格ぐらい。それじゃ今夜、二人の元に向かいますよ」

「今夜？ それはまた随分と唐突だねえ。俺にも心の準備ってもんがあるんだけど……」

逡巡を無視してマティーニを煽り、私は視線で先を促す。

「おいおい、それに幹やん明日は仕事早いつて言つてたから、多分今日は一緒じゃないはずだよお？」

「そんなことないわよ、あーちゃんは今日かなり悩んでいたから」

「……ああそういうことねえ。沙耶ちゃんの言つてた呪いがうまく効いてきたつて事かい。まあ会うたびに繰り返し言われたんじゃ、どうしたつて意識するしねえ。もともと二人がそういう関係だったとはいえども、そこまで効果的とはねえ。怖い怖い、魔術師の呪いつてのは本当に恐ろしいもんだねえ」

「当然でしょ、私がミスしたことあつて？」

「まったく……まあいいよお。あの二人に比べれば、気構えが出来るだけでも儲けモノなんだろうしねえ。せめて値段に拘らず、最後にして最良の美酒でも楽しんでおくとしますか」

「いい心がけね、その味見なら付き合つてあげるわ」

BARの前で待っていると、武人の黒いワンボックスが鬱蒼とした通りに現れた。武人の車に乗り込み電気街を出て、あーちゃんの家に向かう。

今日でこの平和な世界ともお別れかと思うと、少しだけ寂しい気

分になるわ……わずか三年程度の短い時間だったが、束の間でも人としての楽しみを感じられた事を、私はとても幸せに思う。それでもこの世界に馴れるわけにはいかないけど

車は電気街から左折して大通りに出た。私は、来たときのことを思い出す。この世界に来たときのことを……

「こつちの世界に来た時は、武人にはずいぶんお世話になったわね」

武人は、前の車との車間を気にしながら運転していた。

「まあねえ、最初に会った時には電気って何？　なんて言い出すから、どこぞのお嬢様かと思ったもんだが、なんせこの時代に生きてる俺って人はオタクと呼ばれるけど、最先端の事に関する情報はあるからねえ。とくに電気製品・ネットワーク・ゲームの分野に関しては知識が豊富で、この世界でもっとも技術の進んでいるものを凌駕してるからねえ」

「……萌えだのツンデレだの、あんまり必要でもない知識が大半だった様な気もするけど、まあ初めての適合者が最低限まともな人だよかったわ」

「それって俺のことお？」

「他に誰がいるの？　これでも一応、礼を言ってるつもりだったんだけど。どこの世界でも質の悪い人は多いものだから」

「だったら俺も沙耶ちゃんにお礼を言わないといけないねえ」

「私に？　私はただ、私達の問題にあなた達を巻き込んだだけなのよ？」

私は武人の言葉の意味が理解できず、訝しげに聞き返した。

「俺らオタクは現実から逃げたいもんなんだ。それが影響してゲームやインターネットで一日を過ごす。この世界には安らぎなんてない、とくに俺や幹やんの歳になると仕事という組織に幽閉させられて、奴隷のように扱われる。まあ金がなきゃ生きていけないから、しかたがないんだけどお、かなり辛い世界だよお」

少しだけ普段よりも声のトーンが落ちているような気がして、武人の顔を横目で覗くが、表情は相変わらず飄々としている。

「つまり俺は自由に自分が活躍できるところに行きたい訳なんだあ。沙耶ちゃんがあの世界に俺らを連れてって何をしたいのかわらないけどお、俺にとっちゃこの世界から逃れられる唯一の方法だと思うんだよねえ。だから沙耶ちゃんに出会えた俺は幸せなんだよお」

「変わってるのね……」

「沙耶ちゃんから見ればそうかもしれないけどお、でも幸せの基準は人それぞれだからねえ、今の俺の気持ちとしては、この現実から逃れる事が幸せに繋がる。って言う事でありがとうを言いたい訳だ」

「そうね、幸せなんて人それぞれなのね、あなたが幸せを掴めるようになるといいわね」

「ああそうなるように精々努力するさあ」

私達の乗る車は閑静な住宅街に入っていく、夜も更けて辺りは暗

く静まり、私達は騒ぎ立てないようにあーちゃんのアパートに向かった。部屋の前まで来ると、ポストの裏を探り合鍵を取り出す。

「あらあら無用心なもんだねえ、それとも幹ちゃんのためかな？」

「もともとそういう子なだけよ。平和な環境で幸せに育ってきた…
…そんな子だから」

「ふうん……まあなんにせよさっさと行きましようや。午前二時すぎ、何か起きるには頃合の丑三つ時ってねえ」

扉を開きあーちゃんの部屋へと入った。何も知らずベッドの上で気持ち良さそうに抱き合って寝ているあーちゃんと幹也。

「準備するから少し手伝ってもらえるかしら」

「いいけどお、俺は沙耶ちゃんの魔術の事なんかまるで分からないよお」

「そういうことじゃないわ。まずそのテーブルをどかして絨毯も剥がしておいて」

「そんな事してたらこの二人起きやしないかい？」

「大丈夫よ、ここまで進行しているなら既に大分深い所に潜っているはずだから、今頃は二人で楽しくおしゃべりでもしてる頃じゃないかしら」

「はっそれなら安心だねえ、俺も初めて夢の中で自由に動ける自分に気づいた時は、ゲームの夢を見てるって勘違いして楽しく戦って

「たもんだ」

武人はそんな事を言いながら遠慮も無く絨毯を剥がしていった。

「少し時間をもらうわよ」

私は台所から果物ナイフを持ち出し手の甲を切りつけ、流れ出た血を使い床に魔法陣を描いていく。

「それはどういう意味の文字なんだい？　もしかして、それが噂の【古代ルーン文字】ってやつなのかい？」

「集中してるの！　少し黙ってて！」

興味津々に聞いてくる武人を黙らせて黙々と魔方陣を描いていく。

「出来たわ。二人をこの中に運んできて」

武人が二人をそつと動かしていく。

「っ……結構重いですけど……手伝う気ないんだねえ」

「女に手伝わせる気？　男なんだから文句言わないの。それに女の子を抱きかかえておいて重いだなんてあーちゃんに失礼よ。終わったんならあなたもその中に入ってて」

武人が魔法陣に入った事を確認して、もう一度ナイフを取り出し今度は手首を切りつけ、流れ出る血を魔法陣の中に浸していく。

「わお。痛くないのかい？」

「痛いに決まってるでしょ。今度喋ったら失敗するかもしれないわよ　始めるわ」

私は痛みを頭から追いやり、古の言葉を心の中に思い描く。決して間違えないように、何度も何度も　集中が頂点に達した時、言葉として放つ。

「我八無垢ナル邪悪　我繋グ冥府ノ道　」

血で描かれた魔方阵が光始めた。

「おおお」

光は次第に強まり紫色に変化してゆく、それと同時に私自身の疲労も強まり血の気が失せていくのが分かる。

「おいおい大丈夫かよお、沙耶ちゃん顔色悪いよお」

「いいから黙ってよ！　気が散るじゃない」

武人は心配そうに私を見上げてくる。

「我血ヲ糧ニ　道ヲ示セ　」

「うっ……まぶしい！」

光は武人の目を眩ませて辺りを包みこむ。

「コノ者達ヲ　我大地ニ解キ放テ　」

私の言葉に続いて光は破裂したかのように輝き、一瞬にして消え去った。あーちゃんの部屋には無造作に置かれたテーブルと絨毯が転がっている。私は無事に三人がこの世界から旅立ったことを確認して安心する。

「武人……しばらくの間二人の事……頼んだわよ」

不意に体の力が抜けて床に崩れ落ちた。

広がる青空に雲が漂い、荒れ果てた山々が幾重にも立ち並ぶ大地。冷たい空気を運ぶ風が頬を掠めた。

またこの場所に来てしまった。でも、ここには誰もいない。もう嫌な思いはしたくない、幹也はちゃんと見てくれているかな？

私は膝を抱えて、漠然と遠くを眺めていた。このまま朝を迎えられれば隣には幹也がいる。ただそれまでの辛抱だと

それにしても綺麗な景色　静かで色がシンプル、青の空・白の雲・茶色の大地。緑がなくても自然って感じられるんだ……写真を一枚撮りたいところだけど夢の中じゃ無理ね。

私は自分の冗談に口元が緩むのを感じた。はたから見ればおかしな人にも見えかねないけど、ここは私の夢の中なんだから心配する必要も無いか……

そんなことを考えていると、不意に足元のほうから男の声が聞こえてきた。私は恐る恐る崖下を見下ろすと、気づかなかったのが不思議なほどの距離で、幹也が石を蹴り飛ばしてわめいていた。

「なんでここには沙耶ちゃんがないんだよ！　沙耶ちゃんに会いてえ〜」

「馬鹿……」

ため息をつき、心を落ち着かせ幹也に目をやる。

「結局俺も寝ちまったのか？　なんとか藍より早く起きないと〜」

「もつばれてるから遅いと思いますけど？」

「いや、まだ藍より早く起きればばれない可能性も残ってるはず」
幹也は未だに私に気づいた様子もなく、一人で必死に構想している。

「誰に言ってるんですか？」

一瞬固まった幹也はゆっくりと私のほうへと目をやった。手を伸ばせば届くほどの距離に、仰け反るように驚いている。

「藍？ うわぁ、何で今日に限ってお前が近くにいるんだ？ いつも夢では遠くにいるのに、それに沙耶ちゃんはどこ行ったんだ？」

いつもの夢……？ いつも夢の中では、幹也はずっと隣にいた。それに、なんだろうこの違和感、何かが分かりそうで分からない。

「藍？ 聞いている？ 沙耶ちゃん知らない？」

言いながら段差をよじ登ってくる幹也。

「知らないですよ！ 何ですかさっきから、沙耶〜沙耶〜って、そんなに会いたくないなら自分で探せばいいじゃないですか！ 今はそれどころじゃないんですよ！」

「そんな怒らないでよ、何か今日の夢の藍は怖いな〜」

「しるさいです」

今日の夢？

「あつっ！ えっ！ うそ？ 何で幹也喋ってるんですか？ 何で現実の 寝る前の事を知っているんですか？ まさか……私の夢に幹也が入ってきたって事？」

「まさかあゝ藍が俺の夢の中に割り込んできたんだろ ん？ ええゝなんで！ 訳が分からない！」

そもそも夢の中で考えて会話していた事なんて今まで一度も無い。会話している状況をなんとなく体感していただけだったのに……

「何が起きて……えゝと……ありえないですよ？ 普通……」

「そんなこと俺に聞かれても ちよつと待て冷静になろう、二人が一つの夢に存在してるんだよね？」

「一緒の夢を見ているって事……ですか？ どう考えてもありえないですよ」

困惑する私と幹也、冷静になればなるほど考えられない自体が起きている。夢を体感するどころか夢の中で考えて行動できるなんて、どう考えてもありえない。

そもそもありえないと考えてる事自体がありえないのに。

「それにはあ俺が答えてあげるよう」

ふいに頭の中に聞きなれない男の声が響いた。

「藍……今なんか聞こえなかった？」

「うん……知らない男の人の声が聞こえましたよね……」

私達は周囲をキョロキョロと見渡した。

「何か俺、この声の主知ってるような……」

「知り合いなんですか！ 誰？ 誰なんですか？」

「ちょっと待て〜 出てきそうので出てこないから〜」

「誰なんですか？ 私が知ってる人ですか？ ねえねえ」

何か分かるかもしれないという思いに、無意識に焦ってしまふ。

「うるさいな〜」

「だってえ」

「……………」

幹也は何かを思いだしたように手を叩き、中空を見つめた。

「あっ！ この口調タケだ！」

「タケって……前に二、三回一緒に飲んだ、色白で細くて貧弱そう
でひよろつとしててゲームオタクで根暗な人で二トトなあの人で
すか？」

「お前……当たっているが、それはちょっと言い過ぎ〜」

「だって本当のことです。食が細いのはわかるけど、食事もしない
で間食ばかりしているじゃないですか。頭は良いのかもしれない

けどゲームオタクってのもちょっと　それに落ち着いているだけ
だとは思ってはいますけど、やっぱりなんか暗い印象が強くて」

「はあ、」

幹也は深くため息を一つ、呆れているようだ。

「藍、そういう考え方やめなよ、タケはいい奴なんだから」

「そうそう、俺はいい奴だよあゝ藍ちゃん」

後ろの方から突然聞こえてきた声に驚いて、私達は声のする方を見
た。

いつもと違う夢は藍と出くわす、互いの言葉は現実的で今までにない感じがした。俺と藍は状況も読めないまま混乱している。しかし一向に答えはでなかった。そんな時、後ろから聞き覚えのある口調を聞いて振り向いた。

「グットオ モーニングウ」

軽く右手を上げて挨拶をして近づいてくる人物は、俺の予測通りタケだった。

「やっぱりお前か、でもなんでタケが俺の夢に？ それになんだよその格好」

タケは、ゲームの世界のコスプレとしか言いようがない服装を身に纏っていた。今までニートっていうことは解っていたが、そっこの趣味があることは今まで気がつかなかった。

「お久しぶりだねえ、藍ちゃん」

「お久しぶりですね」藍は驚かなかった。

「おい！ 無視かよ」ツツコミを入れる。

「ん？ 格好？」相変わらずの飄々っぷりに愕然とした。

「ああゴメン、これのことねえ魔法のローブだよお、とりあえず詳しい話をしないとねえ、ここから西に向かったところに町があるか

「らあ、そのBARで話すよあ」

「何をいきなり」

「立ち話もなんだろうに、落ち着ける所のほうがいいだろあ」

「でも私こんな格好じゃ」

藍は今の着ている服装を恥ずかしがっていた。というのも無理はない、ワンピース一枚に何故か裸足。そういう俺も古着屋でも売れないようなボロボロの服装だった。

「そっいえば俺もこんな汚いボロ服じゃ恥ずかしいな、そもそもなんでこんな」

俺の話も聞かずにタケが肩に担いでいた麻袋を漁り始める。

「まったく仕方がないなあ、一応と思ってたけど用意しておいて正解だったみたいだねえ、これでも着ときなよあ」

俺らの目の前に差し出されたのは二着の服だった。ゲームの世界でいうならば、旅人の服と絹のドレスといったものだろう、俺はコスプレの趣味はないが着ているボロ服よりはましだろうと思いつ替える事にした。

三分後、着替えを終えて意外と似合う事に気づいた。目が覚めたらコスプレの趣味をもった新たな自分と、向き合う事になるだろうと思った。

「じゃあ私も着替えるから、あつちを向いてくれませんか？」

俺とタケは、言われるがままに向きを変える。勿論見慣れている事だが、そのことをタケにはれないようにするためだ　　つと藍に示す為にそうした。

（ねえ幹やんまで背を向ける必要ないんじゃないのぉ？）

（それを言うなって、その事タケは知らない事になってるんだから）

（そうだったけえ？　じゃあ俺が変わりに振り向くよぉ）

（ちよっと！　待つ　　）

タケは俺の止める言葉も聞かず後ろを振り返った。

「じゃーん！　残念でした。着替えは終わりましたよ」

俺もすぐさま振り返るとすでに着替えを終えた藍がいた。内心ほっとする俺は、彼女でもないのに嫉妬心を抱いてしまった。

「藍ちゃん似合ってるねえ」

「うふふ、ゲームの中のヒロインみたいでしょ」

藍は回ってポーズをとった。どうやらまんざらでもない感じで嬉しそうにはしゃいでいる。こいつも目覚めたかと思い、俺は同士を見つけた。

「確かに似合っているけど、何がゲームのヒロインだよ、ここには

ヒロインを連れて行く悪いドラゴンなんていないんだぜ」

「そんなことわかってます。ノリが悪いですよ幹也」

藍は多分「ならば勇者としてお守りせねば」っなんていうセリフを期待していたのかもしれないが、そんな幼稚染みた事は願い下げだ。

「まあいい事もないんだけどねえ、とりあえず向うに下級のモンスターならいるよお」

俺と藍はタケの指を指した方向を振り返った。木の間から覗かせるのマッチョな肉体、よく目を凝らしてみると、猪の顔をした大男だった。

「きゃああああ！」

「何だよあの怪物、怖すぎるぞあの顔！」

「何って言われても、この世界の下級モンスターだよお。猪の顔をした野蛮で暴力的な奴さあ。なあ〜に心配することないさあ、あいつは避けることを知らない馬鹿だから俺に任せておきなよお」

「はあ？ 何言ってるんのタケ、ゲームのやりすぎで頭おかしくなったんじゃない？」

「まあ見ててよお」

タケは猪モドキに手をかざし、なにやら呟いている。猪の化け物は雄たけびを上げ俺達の方へ走って向かってきた。藍は既に腰が抜けて動けない様子、逃げたほうがいいと思ったが、タケの手にぼん

やりと光が現れ興味をそそらされた。

「行くよお」

タケの手から火の玉が放たれ、化け物に向かって飛んでいった。火の玉は敵にぶつかり、爆発が起こる。猪モドキは炎上し丸焦げになってその場に倒れた。

「すげえ！　なんだよ今の？」

「魔法みたいなもんだよお、ゲームで出てくるやつと同じさあ凄いでしょ。それにしても幹ちゃん、あれを見てビビらないなんてどうかしてるよお」

「いや〜ビビったよ。ただ、どうせ夢なんだから気にする必要はないだろ？」

「やれやれ幹ちゃん、BARでゆっくり話すけどお出来ればその考え方はやめたほうがいいよお、この世界にリセットボタンは無いからねえ」

「……？」

「まあいいや、彼女は幹ちゃんがおぶって来てよお、重い荷物は持ちたくないからあ」

藍は腰が抜けてしまっ立ってなくなっていた。しかたがないと心で悔やみ背中に藍を担いで立ち上がる。

俺達は、荒れた山道をしばらく進んだ。歩き難い山道の疲れも相まって、思った以上に力の抜けた藍の体重は足腰に響き、俺は心の中で藍の別腹を恨んだ。

(ダイエットを望む)

「幹也！ 酷いです！」藍は怒った。

心の中で言っただつもりだったが、どうやら声に出して言っただけ、藍は無理やり背中から降りようとすする。

藍は頬を膨らまして不機嫌な御様子だ。俺はため息をこぼし藍の機嫌を取り戻すために必死に声をかけるが、なかなか直らない、どうやら気にしていた事だったみたいだ。

俺の個人的な意見としては、とても太っているといえない程度。どころか、もう少し歳相応に胸が欲しいぐらいなのだが、そこまで気にしていたとは……

「なあ、いい加減機嫌を直そうよ、謝るからさあ」

「……………」

「無視かよ！ タケも何か言ってよ」

「……………」

「お前もかよ！」

二人の無言に孤独を感じる俺はこの場の雰囲気をなんとか改善しようと考えを巡らせる。

そうして思いついたのは《褒め褒め作戦》だった。

これは俺の最終兵器であり超必殺技でもある。これを幾度となくこなし、藍の機嫌を取り戻す事に成功させた経歴があった。

最初の発端はSEXだった。幾度となく自分だけゴールし、タバコに火をつける行いが藍にとって理不尽だったこともあり、不機嫌さを悪化させていた。俺は機嫌を取ろうと、「うまい」「可愛い」「良すぎる」「俺のツボを知っているのは藍だけだね」などの言葉を重ね続けた。本当はただ早いだけだったのだが、自分の力量不足ともいえるので、褒め褒め作戦は決行するしかなかったのだ。

今更だが自分に愕然とする。

五分後「そんなことないデスよ」と嬉しそうな藍の顔を見て、勝利の雄たけびを心の中で上げた。藍の機嫌をなんとか取り戻した俺は、重たい荷物を担ぐ事無く西の町に無事向かうことになった。

第二章 4 (武人)

虚実(前書き)

初の感想、ありがとうございます。
誰かに読んでいただけていると分かると、とても励みになります。

さてさてえ、これでやっと待ちに待った事が起きてくれたわけだ。後はお二人さんにもさっさとこの世界に馴染んでもらってえ、楽しい旅の始まり始まり〜ってねえ！

うまくそうなる為にも、ここからが俺の話術の見せ所って訳だろお？ OK〜沙耶ちゃんの期待に応えて見せようじゃないのお。

とまあそんなことを考えながら、俺は二人を連れて俺の最近行きつけにしているBARへと向かう。幹やん達にとっては見慣れない造りの町、目に映るすべてが理解出来ずにいるのかキョロキョロと辺りを見回している。二年半も前からこの世界を知っている俺にとっては何でもない物でも、来たばかりの幹やん達には物珍しいか。俺も最初はこんな感じだったのかと思うと恥ずかしくなってくるねえ。

「あれって何が光ってるんだ？」

裏通りを照らす街灯、科学の無いこの世界では勿論電球が付いていない。代わりに魔法の力で作られた光の玉がほのかに足元を照らす程度の明るさでそこに留まっている。

「何かこの町にいる人達みんな、雰囲気が違うんですけど、正直ドレスじゃちょっと目立つだろうと思ってたんですけど……」

俺の見立てたドレスは当然のように人ごみの中に溶け込んでいる。ここが前の世界の裏路地にある歓楽街の様な場所だから、というわけではない。

そんな幹やん達の問いかけにいちいち答えてたらきりが無い。俺はさっさと行きつけのBARに入っていく。幹やん達もしかたなく

それに続いた。暑苦しい体躯の男達で賑わう店内を見渡し、開いていた奥の席に座るやいなやメニューについての質問が入る前にと勝手に注文していく。

「適当に強い酒でいいよねえ？　しらふじゃあ話にくい事もあるしねえ」

幹やん達の返答も聞かず注文を締めくくる。

「さてさてえ、それじゃあまず何から聞きたい？　とは言っても俺も幹やん達よりも少し早く来てただけだからねえ、概要しか知らないから話せることも限られてくるけどお」

二人は少し思案する様子で顔を見合わせると、何を通じ合ったのか、藍ちゃんが頷いて話し始めた。

「じゃあ……まず私から聞きますけど、ここは夢の中？　それとも現実なんですか？」

「確かに俺もまずそれを聞きたい、夢にしてはリアル過ぎる」

「……少し前までは夢でしかなかったねえ、でも今日の今この時点では既に現実なんだよお。怪我すりゃあ痛いし、死ねば死ぬ。ただの現実だよお」

「それって私の見た夢のようなことが起きてるってこと？　やっぱりあの夢は本当に現実だったんだ！」

驚愕した顔つきに変わる藍ちゃんに対して、幹やんは相変わらず平然としている。

俺としてはどうにも面白みが足りないねえ。

「俺はいまいち納得いかないが、死なないように気をつけた方がいいみたいだね。じゃあ次つ、俺の質問。夢が現実であるわけがない。ここはどこなんだ？ それに藍と俺とタケはなぜこんな所にいる？ この三人がいる理由は？」

「どこって言われてもお、ここはBARだろ？ 三人でお話がてら飲みに来たからねえ。ほら噂をすれば飲み物が届いたよお。」

俺達の前にロックグラスに入った透明な液体が届いた。酒好きな幹やんはどんな酒なのかと興味を引かれたようだ。軽く匂いだけ嗅いで口に含み、ゆっくりと味わうようにして飲み下す。

「かあー、効くねーこの酒　っておい！」

「これって……何のお酒なんですか？　うわ！　変な匂いがする」

藍ちゃんも幹やんに釣れられて口に含んでみる、その瞬間藍ちゃんは椅子から立ち上がり猛ダッシュして店の外に出ていった。

「そついえばあいつ強いお酒飲めなかったんだな　ってというか話を逸らすな！　質問に答えるよ」

「ん？　何の質問だったっけ？」

「まあいいや、答える気がないわけね、なら藍を連れて元の場所に戻るよ」

「おいおい、そんなにカリカリしないでくれよお。俺だって話せる

事は限られてるって言っただろお。話がデカイ！ 順序良くいこうよお」

俺ははぐらかようにしてグラスを煽る。

「はあ〜OK、わかったよ。じゃあ現実っていつならこの世界は実在するんだろ？ 地球のどのへん？」

その質問の途中に藍ちゃんが腕で口を拭きながら帰ってきた。どうも藍ちゃんにとってあの酒はかなり強い部類に入るらしいねえ。

「お帰り藍ちゃん、マスター水一つ。それにしても幹ちゃん、いい質問するねえ。それは俺も考えた事無かったよ、地球で言うところの辺になるのかなあ？ 聞いた事も無かったよお。だってここ……異世界だしね」

藍ちゃんは水のグラスを両手で抱えると一気に飲み干した。

「はあ、死ぬかと思いました。それにしても異世界ですか〜話しを戻しますけど私達、死んだら死ぬって言ってましたけど、元の世界の私や幹也が死ぬってことなんですか？」

「現実だつて言っただろお。異世界の〜とか元の世界とか、関係ないよお死んだら死ぬただそれだけえ」

「なるほど、つまりこの異世界で死なずに朝を迎えればいいって訳だ。そうすれば現実で目を覚ました俺らは何事も無く生活できるわけだろ？ 前から来てたつていう武人がそう言うんなら間違いない」

「そういうことですね。じゃあ〜ここで起きるまで、お話しません」

か？」

藍ちゃんは夢の恐怖を克服したかのように、ほっと肩の力を抜いた。まったくもって面白い二人だねえ、思わず笑いがこみ上げてくるよお。

「いいねえ、幹やんも藍ちゃんも、そういう考え方大好きだよお！断然話しやすい！それで？この不思議な世界にせっかく出会えたんだ。なんか他に聞きたい事はないの？今しか聞けないよお！」

最高！と乾杯するようにグラスを掲げる。

「わかった、じゃあさつき倒した猪モドキはいつたいなんなんだ？あれみたいなのが他にもいるのか？」

「ちなみに前に見た私の夢には猿モドキが出てきましたよ。怖かったけどなんとか逃げ切ったんです」

藍ちゃんは得意げにそう言って、えっへんとばかりに小さい胸をつきだした。

「ああ。あつちの世界でも同じ表現だし幹やん達もモンスターって表現で通じるよね？あんなのはわんさかそこら辺にいるよお、他の種類もいっぱいね。大自然の動物達を想像してもらうと分かりやすいかなあ」

「なるほど、ゲームのモンスターみたいなのがそこらじゅうにいるんだあ。それを倒したタケは何で魔法みたいなのが使えるんだ？俺の夢なんだから俺が使えてもおかしくないんじゃないの？」

「つてか、そもそも何でお前が出てくる？」

「うん……私も気になった。武人が私の夢に出てくるなんて初めてですし」

二人は顔を見合わせて俺の存在を気にし始めた。

「俺の話は別にいいんだよお。それよりもそう！ 力だよ！ 幹やん達も使いたかったら使えるようには出来るよお、でも簡単には手に入らない。小難しい契約とそれなりのリスクがいるんだよお」

「俺はゲーマーじゃないが、そういうことができるのは男のロマンだ！ 是非とも力を手に入れたい、どうすればいいんだ？」

幹やんは興味津々で聞いてくるが、藍ちゃんはいまいちな反応、幹やんに守って貰えるんなら 程度にでも考えてんのかねえ。

「簡単だよ。力を貰うんだ、その代金を払えばいい。ただ払う相手は本物の悪魔さんだからねえ、何万円なんてのは通じないんだよお。自分の持つてる何かと引き換えに力を与えてくれる、そのモノに見合っただけの力をねえ」

「わかりづらいなあ、とにかくその悪魔さんはどこにお住まいで？」

「いうなれば、夢と現実の狭間……とでも言うのかねえ、この世界に来る途中で通り過ぎてる場所だよお。悪魔が住んでいるのはそういう地獄とか闇の世界なんて言った方がしっくりくるだろお？ 話が聞きたかったら案内するけどお？」

「案内してくれ、面白そうじゃねえか！」

「ええ、今から行くんですか？ 今日はやめましようよ、明日来たときにすればいいじゃないですか、せつかく何事も無く夢が終わるんですよ」

「そう言われるとたしかに、無理に今日する必要はないな。夕ヶは明日また夢に出てきてくれる？」

「夢に出てくるかは別として、明日にするのはかまわないよ。代貨を考える時間もいるしね。それに人を訪ねるにはもう遅い時間だしね、まあ彼らの場合人じゃないから時間は関係ないと思うけど？ 今日はこの上で泊まっていくといいよ。飲んでそのまま泊まれる宿付きBAR、俺が行きつけにする理由がわかるだろ？」

「ん？ あの、今寝てる最中なんですけど」

「まったく……既に要点は話したし、そろそろ頃合いかねえ。」

「誰が寝ているってえ？ 今ちゃんと起きて話しているじゃないか」

「俺はからかうように笑いかける。」

「それにしても……なかなか目が覚めませんよ」

二人がこの世界で目覚めてから既にかなりの時間が経っている。藍ちゃんは不思議そうな顔で辺りを見渡した。

「そういえばそうだな、そろそろ起きないと仕事に間に合わないか」

も、藍起こしてよ」

「私が起こせるわけ無いじゃないですか！一緒に寝てるんですから」

そう言っつて二人は考え込み始めてしまった。

「本当に、いい加減目を覚ましなよ。何回言わせる気だい？マスター、清算していつも通り宿代に付けといて！もう一度だけ言っつよお。これは現実なんだ、夢じゃない」

「ええ？」

二人は口を揃えて 啞然とした。

「じゃあ 俺達は元の世界にどうやって戻るんだ？」

「そうですね、元の世界で寝ている私達はどっなってるんですか！」

「こっちが現実だつてことはあつちが夢、つまり元の世界にはもう俺達はいないんだよお。それと戻る方法は俺も知らん」

「マジで！」「うそお！」

二人は驚いて固まった。

「ちょっと待てよ！おかしいだろ？タケは前からこの世界に来てたつて言つてただろ、今日お前の家で一緒にゲームしてたじゃないか？それじゃ話が通じないだろ」

……やっぱりそうくるよねえ。さてさて、

「今日って……何言ってるんだい？ 三日も前の話じゃないかい。何を」

俺は思案する振りをして視線を落とす。

「ああそうかあ。気が付くまでの時間にそれだけ誤差があったって事か。いいかい幹やん、俺が戻れたのは三日前まで話だよ。俺はそれから戻れなくなってるんだ、幹やん達も今日会ってからここまでの時間を考えると」

「冗談だろ？ それじゃどうすんのさ、これからこの世界でどうやって生きていけばいいんだよ！」

藍ちゃんは何も言わず崩れ落ちた。

「なあに……どこの世界でも同じだよ、力があれば生きていける。ただこの世界では力が無い事が死と直結しているだけさあ。……いや、前の世界でもリアルに感じなかっただけで結局同じか、どっちにしたって力が無きゃ生きていけないんだよ」

「わかった、じゃあ今日はまず寝よう、明日朝一でその力とやらを手に入れて行動しよう、何もしないよりはましだ」

はっ……こんなもんで納得か、まあ信じるしかない状況だしねえ。言いくるめるネタを色々考えてはいたけど、いい具合に手間が省けて助かるねえ。

「いいねえ、最悪俺が尻を叩いて現状を教え込む事も考えてたんだけどお、それだけ前向きに考えてくれると俺も助かるよお」

「そういうお前は帰れなくなった割に随分と余裕なんだな？」

おっと、そういえば俺も【こんな状況に陥った人の一人】だったねえ、どうにも簡単すぎて忘れるところだったよお。

そんな事を考えている俺に、幹やんが訝しげな視線を向けてくる。

「前から来てたって言っただろお？ 寝泊りできる場所から金の稼ぎ方、この世界で生きるのに必要な事は少なからず知ってるからねえ。突然そうなった幹やん達とは心持ちが違うのは当然だろう？ それに 前の世界なんて俺が居ても居なくても何も変わらないだろ？ 俺にはあっちの世界で大事なもんなんて……大してなかったしねえ」

俺はそう言い終わる間に段々と声を落として、雰囲気も暗く演じていく。そんな俺に幹やんも無神経な質問だったのだろうと感じたのか、それ以上聞けなくなる。

そんな空気の中、藍ちゃんが落胆したように呟いた。

「私、先に寝ますね。部屋はどこなんですか？ ここでならもうこんな夢を見なくてすみそうですし」

「ああ、カウンターに居るマスターに聞いてみなよお。そろそろ寝るとしますか、それじゃあまあ、なんだかんだ辛い事もあると思うけど、頑張っていこうねえ〜。それじゃおやすみ〜」

俺はそう言っただけいつもの飄々とした空気に戻して自分の部屋へと進んでいった。

第二章 5 (第三者)

魔境

(本当によかった、やっと終わった……これでやっと帰れるんだ、私の世界に)

沙耶は床に倒れたまま動けずにいた。力を使い果たしたこの体はまもなく力尽きるのだろう、沙耶に死の感触が近づいてくる。

(痛みが無くなっていく、意識が体を離れていく。これが死ぬってことなんだ……今ならほんの少しだけ、あいつらの言っていた言葉の意味が理解できるかも……)

次第に薄れていく意識をまるで寝起きのまどろみのような気分で楽しむ沙耶に、死に対しての恐れはなかった。

(死は尊大たるもの。忌むべきでなく受け入れるものか、確かにそうね。始めて知ったわ……人としての死がこんなにも……気持ちいいなんて)

沙耶の意識はそこで途絶えたのであった。

薄暗い空間の中で大勢のうめき声にも似た低い声が響き渡る。

「魔境の空気がやけにざわめくと思えば、やっと帰って来たのか。」

「サヤ」

男の前には異様な光景が広がっていた。天井から円筒形に生えた黒々とした滝のようにさえ見える木の根、その根から生まれてきたかのように体の一部が木と同化している何人もの素肌の男女。彼らはまるで安らかに眠っているかのように木の根に体を預けている。

その内の一人の女性がうつすらと目を開き男を見た。

「長かったな、もうあれから三年になるのか……」

すると彼女はゆっくりと口を開く。

「ああ、感傷に浸つてるところを邪魔して悪いけど、さつさと私の封印を解いてもらえないかしら？　いつまでも動けないまま他人に素肌を晒しているのは、あまり気持ちのいいものじゃないんだけど」

「そんなに邪険にするな。お前からすれば今帰ったところでも、私達からすれば何年も待ち望んだ事なのだから」

男はそう言つて彼女の体に触れると、鍵を開けるような仕草で封印を解いた。そのまま首を掴んで彼女の体を引き抜いていく。

「くう、あつ」

首を掴まれた痛みと、まるで生暖かい肉の壁の中から這い出るような感触が気持ち悪く、彼女はうめき声を漏らす。

「ちょ……もう少し……優し……く出来……ないの？」

「ここしか掴める所が無いだろ？　少しは我慢しろ」

完全に彼女の体が木の根から解き放たれた。男は首を手放し彼女は床に崩れ落ちた。

「……三年ぶりだったのに相変わらずなのね、ラドルグ」

「俺達には寿命ってものがないんだ、三年如きでは簡単に変われんよ」

「それはそうと　かなりの人数が私より先に戻って来ているみたいね」

彼女は木の根に目を向ける。自分が同化する時よりもざっと十数人は人数が減っていた。

「そう何年も同化していられる奴はそうそう居ないからな。これでも心配していたんだぞ、お前ほどの力でも三年ともなるとギリギリのラインだろ」

「なかば間に合わなかったようなものね。向うで体を借りていた女の子を犠牲にしてしまったわ、三年ともなると私一人の力じゃ足りなくなってた……あの子には悪い事をしたわ」

「そうか、まあよかったほうだろ、たった一人の生贄で、無事に帰ってこれたんだからな。これでやっと四人目だ」

彼女は小さくため息をついた。　そこでふと気づく。

「四人目？　ちょっと待って、十数人は減ってるじゃない。三年も経ってるのよ？」

「よかつた方だつて言つただろ？ 大半が別世界で息絶えたか、到達する前に取り込まれたか なんだかんだで完全に樹の中に同化した奴が大半だ。帰つてこれただけでも本当に幸運だったのさ、お前の場合。悪魔様の御加護と思つて感謝するんだな」

「悪運が強いつて言いたいの？ 馬鹿じゃない？ それにそんなことになるなんて聞いていないわ」

「それがどうした？ そんなことよりも適合者は連れてこれたのか？ 三年もたつて一人でおめおめ帰つてきたなんてこともあるまい」

「ふん……捨て駒として送つたつてことね、それならそれでいいわ、別に気にすることでもないから それよりも、早く何か着る物持つてきてよ、話はその後よ」

やれやれといった仕草でラドルグは暗闇に消えていった。彼女は立ち上がり複雑な気持ちで何人もの仲間を飲み込んだ木の根を眺めていた。

「私以外、たつたの3人……」

自らの成し遂げた事の重大さが、事を終えた今になって彼女の身を震わせた。

第三章 1 (マスター)

武人講座・契約編

店の扉を開け外を見回し空を見上げると、淀んだ灰色の空が広がっている。その隙間からは唸るような雷音が響き渡り今日の売り上げを予期していた。

「今日の売り上げは期待できそうに無いな、泊まり客も昨日の三人しかないしホントついてねえ」

わたしは朝食の準備を始めるためにキッチンに向かった。

「若い活発的な可愛いお嬢ちゃんはパンとスープでいいよな？ それとあの筋肉質のたくましい男は食べそうだから、肉も付けておこう。あとは武人だが まああいつはいつもと同じでいいか」

わたしは彼らが起きて来る前にと、朝食の準備を始めていた。この店はあくまでもBARであるが、宿屋でもある。 といっても客のほとんどが店で潰れた酔っ払いばかりで、正直俺一人で経営する事に疲れていた。

そんな退屈で窮屈な生活に飽き始めていた俺の元に、ついに理想の人が現れてくれた。

童顔で歳は俺より下だろう、体は小さい方だと思うが中身はかなり美味しそうな感じだ。そんなことを考えていると無意識に顔が綻ぶ、わたしは自然と腕によりをかけていた。

「おつ。そろそろいい時間だな、叩き起こしてやるか」

わたしは部屋に戻り準備をして、武人達に朝食が出来たことを伝

えに二階へ上がった。

「武人！ 飯ができたぞ！ 他の奴も起きろ！」

わたしの鍛え抜かれた腹筋から発せられる声は店の外まで鳴り響いていた。

「……うい、ども。今起きるよお」

武人はけだるそうな感じで答えてきた。

「うるせえな！ 起きてるよ！」

幹也はまどろんでいるところを叩き起こされ、少々機嫌が悪いようだ。

「朝から元気がいいな〜結構結構！」

「おはようございます。すみません朝から、ありがとございます」

藍は眠い目を擦りながら部屋から顔を出し、丁寧に挨拶をしてくれた。

口調も丁寧に礼儀正しくて、ホントかわいいお嬢ちゃんだ。

「礼儀正しくて結構結構！」

わたしは三人を連れ降りて行き食事を始めさせて、カウンターに戻って昨日の洗い物の残りを洗い始めた。

「朝から重低音響かせすぎのあのマッチョなオッサンなんなんだ？」

幹也がパンをくわえながら隣に座る武人に聞いた。

「マスター？ 確か元炭鉱夫で副業に賞金稼ぎみたいな事もしてたらしいけどお？ このBARもその賞金で作った趣味みたいなもんらしいし。ここの客層が濃いのも昔の炭鉱仲間が多いせいだろうしねえ」

「それであのガタイね、それにしてもこの料理みんな違うみたいだけど、あのマスターが作ったのか？ 信じられないなあ」

幹也は訝しげにこちらを見てきた。わたしは相手をせずにグラスを磨いた。

「失礼ですよ、男の人だつて料理くらい出来なきゃいけませんよ。それにこの料理も気遣いが効いていてとても美味しいです。幹也も少しは見習つたらどうですか？」

藍の言葉にわたしはすこし頬を染め、静かに頷く。

「俺だつて料理ぐらい作れるよ、玉子焼きでしょそれとオムライスと目玉焼き、あとスクランブルエッグね」

「料理つて言えるのか微妙なとこだけどねえ」

「期待したのが間違いでしたね」

落胆した様子の二人、それを誤魔化すように幹也が口を開いた。

「そんなことどうでもいいんだよ！ それより契約の話しをしてく

れよタケ」

「ああそういえば今日はそれが本題かあ。朝っぱらから難しい話になるけどいいかい？」

意味深に語尾の声を落とす武人、やや緊張した面持ちで二人は頷いた。

「もちろんいいよって言いたいところだが、解りやすいようにお願いします」

「そうですね、解らない事ばかりですから砕いて話してもらえると助かります」

「うい、出来る限りがんばるよお。じゃあまずは概要からで、昨日も話したとおり契約で力を得るためには何らかの代価がいる。その代価によって、得られる力の強さも変わってくる。ここまではいいかい？」

「うんうん、そこまではOK」

「その代価の価値観は基本的に本人に一任される。本人の覚悟の大きさがその代価の価値になるって言った方が解り易いかなあ。つまり、たいした犠牲も払わずに強い力を得られるなんて思わないほうがいいって事だね」

「なるほどね、なんとなくわかってきたよ、タケの力は何を捨てて手に入れた？」

藍は幹也の無粋な質問に武人の表情が微妙に曇った事を察したよ

うだ。

「多分その聞き方は失礼ですよ、幹也」

「いやいいよ、藍ちゃん。確かに説明するには解り易い实例を出したほうがいい、そのほうがリスクも解り易いしねえ」

そう言いながらも武人は呆れたようにため息をついて言葉を続ける。

「俺が捨てたモノは【本能的な限界】だよお、つまり本来体が勝手に制限しているリミッターを捨てた。その代わりに得た力は【机上の空論】。例えば空気中の水を電気分解したり、局地的に気圧を弄って圧縮するとか　まあ簡単に言えば、本来必要なはずの機材やエネルギーを能力で代用するってわけ。結果をイメージしている前提とか一定範囲にしか効果が出ないとか、なんだかんだ制限が多いのが玉に瑕だけどねえ」

「よくわからないけど都合よさそうだね。なんにせよやってみない事にはわからないから、その場所に行ってみますか？　食事も済んだことだし」

いたって楽観的な幹也に藍はため息で答える。

「そうですね。でも、向かいながらも考えておかないといけませんね、武人の捨てた制限なんて、私にはリスクが大きすぎますから、何かほかのモノを考えないと　武人はそのリスク、大丈夫なんですか？」

藍が心配そうに武人を見る。

「自分の限界が解ってない幹やんみたいな奴がこんなリスクにしたらずくに破滅しそうだけどお、俺に關しちゃ平気さあ。制限は無くなっただけど理性が無くなっただわけじゃないし、もともと何事にも本気にならない性分だしねえ」

「問題ないならいいですけど」

「じゃそろそろ行きますか、マスターご馳走様」

そう言つて武人達は席を立ち上がった。

「どういたしまして、幹也、藍、道中はモンスターに注意して行くのだぞ、いざとなつても武人にはさすがるなよ」

「タケの性格はわかってますから、大丈夫です」

わたしはそのセリフを聞き失笑した。

「だったら、行く前に向かいの武器屋に寄るといい、見かけの割にはいい品が揃っているぞ、表通りの見かけだけの店よりはお勧めだ」

わたしは自慢げに店を教えてやった。何を隠そうあの店はわたしが昔お世話になっていた信用のおける店なのだ。

「サンキューマスター、寄ってみるよ　　って俺ら金がない」

「それなら武人から預かつてる金を使えばいい」

わたしはカウンターの引き出しから茶色い袋を取り出した。それ

を幹也に投げると、親指を立ててニカツつと笑ってみせる。

幹也も同じように親指を立てて笑いを返してきた。思っていた以上にひょうきんな奴だ。

「俺の意思は聞いてないわけねえ、まあいいけど。藍ちゃんも何か動きやすい服を選ぶといいよお、いつまでもそんなドレスじゃ動きにくいだろお」

「ありがとうございます。でも武人はどうやってそんなに貯めたんですか？ 宿代に武器、私の服まで話が進んでいるのに残金を気にしないなんて、結構な額ですよね？」

「マスターの紹介で少しの間賞金稼ぎまがいの仕事をしてねえ、実力さえあれば時間が掛からないうえに稼げるからねえ」

「私達もいつまでも一文無しじゃいられないか、何かしないといけないですね」

ふむ、二人とも昨日の話しに比べるとだいぶ前向きになっているようだ。詳しい話は知らんが、この異国の者達は随分と苦労しているようだ。

「じゃあマスター、またねえ」

「色々お世話になりました、また来ますね」

「んじゃ行きますか」

わたしはそう別れを告げる三人を、店の入り口で見送った。

「ああ、なんて可愛い子なんだろう、食べちゃいたい」

わたしの突然の口調に通行人が振り向いた。

昨日の晩何度も何度も頭の中に浮かぶ現実という言葉、俺はここが現実なわけがないと思い、これは夢の中であって、リアルに感じただけだと思いついていた。

タケの言っていた現実を認めざる負えない状況を悔やんだのは、マスターの宿で目が覚めたときだった。なんだかんだあつたとしても目が覚めれば、朝からバタバタしている藍を見ることになると思っていた。しかし、目が覚めて目の前に現れたのは殺風景な天井だった。勿論、隣に寝てたはずの藍の存在もない、一晩眠りについた実感と現実的な絶望感を突きつけられた瞬間だった。

当てることの出来ない苛立ちはマスターの重低音に向けた。
マスターごめん。

マスターからタケのお金をもらい店を後にした俺達は、向かいの武器屋に入った。

「すげーな、ゲーム中で見た事あるようなものが並んでいるよ」

店の中にはさまざまな武器防具が飾られている。中には西洋っぽい剣や甲冑が並んでいたり、見た事のない形のものまであった。タケの言葉は耳に届かず、すでに色々なものを手にして回った。

しかし、鎧は相当重そうな物ばかりで剣もやたらと重量級、ゲームのキャラクターがやたら振り回しているが、現実には意外と苦労しそうだ。

「なあタケ、お手ごろでいいのなんかない？」

藍も武器探しには苦労しているようだった。傘立てのような入れ物に並んでいる剣を試そうとして触っていたが、持ち上げる事も出来ず諦めたようだ。

「実物の剣は重すぎて俺達みたいな一般人には使い勝手が悪いからねえ、細くて軽い片手剣の類があっちの棚にあるから見てみたら？ 藍ちゃんもそんな重たいの、どうせ持ち歩けないだろお、あっちの短剣とかの方が現実的なんじゃない？」

「そうですね、こんな重い物持って歩きたくないですし」

藍は鞘から抜こうと頑張っていた剣を放り出して短剣の棚へ向かって行った。一方俺は軽そうな剣の中から珍しい形の剣を見つけた。

「タケ、これってどうやって使うんだ？ 他の剣とは違うみたいだけど……」

通常の剣と違い刃の部分が広く、極端に短い。しかもなぜか柄の部分が他の棒状タイプと違って、握ると刃先が親指の方ではなく拳の方に来る、たとえばというなら電車の吊り輪を握ると上の革の部分が剣の部分という感じだ。

「珍しい物を見つけたもんだねえ、たしかカタールだったかなあ？ 刺突用の短剣だよお、まあ簡単に説明させてもらおうと、殴って使うと言った方がわかりやすいかもねえ」

「俺はこれに決めた」

初恋のような感じがしたからだ。

手に取って眺めて見るとちよっと強くなったような気がした。もともと剣が振れるわけじゃないし、殴るぐらいなら経験がある。そ

ういった点では俺にピッタリだと思った。

「まあ軽いし持ち運びも楽だからあ、幹ちゃんにはちょうどいいかもねえ」

「何で武人はそんな事に詳しいんですか？ 普通の人は知らない事だと思っんですけど」

いつの間にか戻ってきていた藍がタケに質問をした。

「まあ一応オタクと呼ばれる人種なんでねえ。藍ちゃんはこんな感じのやつはどう？」

武人はそう言って柄に蓮のようなレリーフの彫られた短剣を藍に渡した。

「この剣……他の剣に比べると少し軽いですね、それにこのレリーフ可愛い」

「儀式用に細工のされたタイプで元々女性用に作られた物だから、刀身が頑丈な割に軽い造りになってるんだあ」

「へえ、じゃあこれにします。蓮が可愛いし！」

「お前なあ、これから危険に晒されるかもしれないのにそんなんで決めていいのか？」

「まあ一応危険に晒されることも考えた上でのこの武器なんだけどねえ、こいつはおそらく【洗礼】の済んでいる武器だろうから、なんらかの魔力が加えられているんだよあ。詳しくは分からないけど、

このレリーフからすると浄化かもしくは守護ってところかな？」

「【洗礼】ですか？ 武器に魔法が掛かってるって事は、この武器を持ってれば魔法が使えるって事ですか？」

「ホントかタケ？」

「おいおい、話が飛びすぎだよ。洗礼されてるからって魔法が使えるって訳じゃないさ、簡単に言うとお守りみたいなものなんだよ、それにどんな効果なのかはわからないしねえ。値段から見てもそうだろうって思うだけさあ」

そう言われて値札を見ると、確かに俺の選んだ剣よりもやけに高いどころかぼったくりなんじゃないかと思わせるほどの一桁の差があった。周りを見る限り俺の剣が安物だというわけでもないだろう。

「どっちにしても私は戦いなんて怖いことできませんから、いざとなったら幹也と武人が戦ってくれますよね？ だから護身用としてもっておくだけです」

「なるべくならその考えはやめたほうがいいと思うよ、これから契約に向かうにしてもそうだし、最悪の場合もし一人で動かなくちゃならない状況になったときに、その時からじゃ遅いだろ？ 最低でも逃げ切れる程度、もしくは幹やんや俺をフォロー出来るくらいにはならないと。ここは何が起きるかわからない世界だからねえ」

藍はその一言に笑顔が消えて、考え込むように目を伏せてしまった。タケはそんな藍を気にもとめず、畳み掛けるように言葉を続ける。

「俺の悪い癖なのかもしれないけどお、常に最悪な状況を考えるんだあ。こんな事はあまり言いたくないけど、俺達が動けなくなつて藍ちゃんが一人で戦わなければならぬとかあもしくは俺達が死んでしまつて」

「そんな事考えたくない！ 幹也達が死ぬなんて考えられない！ そんなのはいや……」

藍は今にも泣き出しそうな目ですがるように俺を見る。

「おいタケ！」

「悪かつたよ、言い過ぎたかなあ。でも、これだけは言っておきたかつたんだよお。もしかしたら藍ちゃんが戦えたおかげでそうなるところを助かつた、なんて事もあるかもしれないしい。強くなつておく事に損は無いはずだよお……」

一瞬、タケは言葉を切つて藍を見据えると、呟くように言い添える。

「体だけじゃなく 心もね」

そんなタケの言葉に驚いた様子で藍はうなだれた。

「まあ落ち着くまで俺は適当に道具でも揃えてくるよお、薬なんかも揃えておいたほうがいいしねえ。その間に藍ちゃんの服でも二人で選んでいなよお」

タケはそういつて俺に目配せすると店の外に消えていった。

「武人って変な人ですね、考えている事が見透かされているみたいで、あまり良い気分ではないです」

「タケはいつも、物事は第三者の視点から見ると言ってるんだって言うだけだから、もう少し言う事を考えて喋ればいいのに……」

藍はうつむきながら首を振った。

「考えた上で言っているんだと思います、言葉はきついですが私の考え方や甘いんだって警告してくれている。言わずにそうなるよりは言った方がいいって事かな……」

藍は自分に問いかけるように呟いて顔を上げた。

「何でこんな事にならなきゃいけないのかは分からないですけど、うじうじしていても始まらないですよ！ 幹也、服を見に行きましよう！」

藍は明るい口調に戻り服と防具の売り場へ駆けていった。

「まったく、タケも藍も無理やり過ぎない？」

誰に言うわけでもなく呟きたため息を一つ零した。俺は藍について服を見に向かった。

藍は動きやすそうなラフな服を揃え、俺は鎖帷子に似た軽い防具を選んだ。藍にも進めてみたが、重たいからイヤだと辞退された。

そうしているうちにタケが帰ってきて一緒に会計を済ます、装飾品の棚に釘づけになっている藍を引きずって店をあとにした。

「それで？ 結局どこに向かうんだ？」

「昨日下りてきた山の溪谷に湖があるんだけどお、そこに一匹の悪魔が住み着いているんだよお。まあ別にそいつじゃなくても有る程度上級の悪魔なら誰でもいいらしいけどお、正直どいつもあまり交渉したい相手じゃないからねえ　悪魔だし」

「確かにな、悪魔なんて出来るならなるべく関わりたいくないね」

「それでも、力を手に入れるためには仕方ないよお。まあ行きがてらに適当なモンスターと戦ってみて、今の自分の実力とどんな力が必要なのか経験してみるんだねえ」

そう言ってタケはのんびりと町の外に向かって歩き出した。俺達二人もタケのあとに続いた。

溪谷の静けさに吸い込まれ消えてしまうのか、この地の風は亡く。波立つ事無い湖の水面は、あたかも巨大な鏡を連想させる。

湖の周りにはその湖を守るように、腕だけが妙に長い魔族を象つた石像が立ち並び、静かな湖の空気を異様なモノに変えていた。その湖の中心の辺りにはどうやって立てられたのか、一本の柱が突き出ている。黒曜石だろうか、黒く滑らかな表面に日の光が反射している。その柱の上にも湖を囲む者達と同じ、腕の長い魔族の石像が立っていた。

その湖の畔に音も無く一人の女が降り立った。

「クドネシカ卿はいらっしゃるかしら？」

彼女は湖を囲む石像に話しかける。石像の首が物言わず頷くとその上に、石像と同じ姿の魔族が降り立った。

「ご無沙汰しております、クドネシカ卿」

女は降り立った魔族に跪き、深々と頭を下げる。

「久方ぶりだな、サヤ・ヴァレス嬢。我の元に現れるのは四年ぶりになるか？ 使者もよこさずに人間の小僧なぞにこの場所を教えおつて。もう少し貴様の名が出るのが遅かったら、危うく【適合者】なのも知らぬままに湖に沈めてしまふところだったぞ」

クドネシカ卿は嘲笑するようにサヤを見下ろす。サヤは小僧と名乗られた人物が武人のことだとわかった。

「事前に伝える事も出来ず申し訳ありませんでした。あちらの世界からでは連絡する手段が無く、私の名の下に彼に出向かせるしか方法が無かったのです。何とか沈められる事も無く契約も済ませて頂いたようで、彼共々本当に感謝しております」

「まあよい、それで今日はどういった用件だ？ 貴様はわざわざ礼を言っただけに出向くような殊勝な女でもあるまい」

サヤは顔を上げ微笑と共に答える。

「失礼ですね、礼を言いに来たのは本当ですよ？ もちろんほかの用件がある事是否定しませんけどね」

その言葉を聞いてクドネシカ卿は破顔した。元々恐ろしい顔なのでとてもじゃないが笑っているようには見えないが。

「まったく、少し会わん間に随分と良い女になったな。貴様の辿り着いた異世界はそんなにも良いところだったのか？」

「今までに見たどこの国よりも平和でした。戦いの楽しみではなく人としての楽しみ方を学んで参りました故かと……」

「女としての楽しみ方を知ったが故か？ まったく、隅に置けんな。我にもその学んできた成果とやらを見せてもらえるのか？」

挑発するような目線にサヤの体がすくむ。

「またのご縁で考えておきますわ。それよりもあちらの世界 彼らはその平和な世界で生きてきた故に、私の連れてきた者達は戦い

を知らぬ者達なのです」

「者達……か、以前に来た小僧は体が鍛えられていない割にはやけに戦いなれていたようだったか……」

「彼の場合は、実戦で戦いを学んだものではなく、人間ならではの思考により空想で戦っていたようなものでしたから」

「なるほど……他の者達もその類か？」

「いいえ、別物です。一人は剣を持たない人間の兵士ぐらいかと……もう一人は普通の女の子です」

「そ奴らの契約の代理人になってくれとそう言いたいわけだな？」

「御察しの通りでございます。以前に契約した者に道案内をさせております。どうか湖の藻屑とせず、契約をしていただけるようお願い致します」

サヤは深々と頭を下げる。

「ああいいだろう、報酬は貴様がいつかまた泣きついてきた時にもゆっくり頂くとするか。それまで精々磨いておけ」

「ありがとうございます。命尽きる前にその機会があればいいですけど……それでは私はこれで失礼させていただきます」

サヤはもう一度頭を下げ、立ち去ろうとした。

「彼の者達を出迎えずともよいのか？」

彼らと会う、その言葉に足が止まる。

「もう少し……彼らがこの世界に順応して生きていける程度になるまでは、会わずに見守るうと思います」

そう言ってサヤは力のない微笑みで答えた。

「はっ、サヤ・ヴァレス嬢も強くなったものだな。助けぬ事が本質的に助ける事に繋がることを学んだか。ますますいつかの機会がある事が、楽しみになったな」

「それでは失礼いたします」

クドネシカ卿は、闇の中へ寂しそうに消えていくサヤの背中を見送った。

三人は町を出て始めに降り立った山へと向かって旅を始めた。藍は何が起こるかと不安に駆られ、買ったばかりの短剣を胸に抱いて二人の後に続いた。幹也はうきうきとした表情で早く使ってみたいとばかりに武器を振り回している。

ふと立ち止まると、幹也は何かを思い出したように叫んだ。

「かつ片方しか買ってなかった！ これじゃワン・ツウーが繰りだせないじゃん」

幹也は自分の不甲斐なさに愕然としているようだった。

「一つ持っていようが二つ持っていようが、たいして変わらないですよ」

そう言って藍が幹也を見ると、その遙か遠くに砂埃が立っている事に気がついた。

「あれ何ですか？ 砂嵐？」

幹也は藍の言葉に後ろを振り返る。砂埃が徐々に膨らみ迫って来ていた。

「砂埃の中に何かの影がみえない？」

「そう言われてみると確かに何かが見えるような」

砂埃の中にうごめく影、よく目を凝らしてみるとそれは想像を絶する二メートル超の巨大なミミズに似たモンスターだった。

「きゃああ！ ちょっと何ですかあれ！ 気持ち悪いです！」

「あれがモンスターって奴なのか？ だったら攻撃開始としますか！ なあタケ」

幹也は武人に振り返るが、武人はいつの間にか消えてしまっていた。巨大ミミズはすでに肉眼で確認できるところまで接近している。

「おいおい、あいつどこ行っただよ！ こんな時に！」

「武人、助けてくださいよ！」

二人が叫ぶように武人を呼ぶと、側にあつた大きな岩の上の方から声が聞こえてきた。

「なにやってんのお。敵さん向かってきてるよお、戦わなくていいのお？」

「武人こそんなどころで何やってるんですか！ 一人だけ逃げるつもりですか！」

巨大ミミズはすぐ間近に迫っていた。よく見ると頭の辺りから口らしきものが大きく開き、中から緑色の液体が垂れ流れていた。

「分かったよ！ お前がやらないなら俺がやる！」

そう言って幹也は右手に武器を構え、ファイティングポーズをと

った。初めての戦闘に顔はまだかといわんばかりに生き生きして、目が輝いていた。

「勝てるわけないじゃないですか！ 逃げましょうよ」

「やってみないとわからないだろ！ そこで見てろ、俺の渾身の右ストレートをおみまいしてやるぜ！」

巨大ミミズが幹也の射程内で高く体を伸ばした。

「くらえ！ JETストレート！」

「なんかのマンガで見たような名前だねえ」

幹也の剣はたいした抵抗も無く巨大ミミズに突き刺さる。

「ん？」

巨大ミミズは雄たけびを上げ、頭を幹也の頭上に落とし食いつくようにと口を広げた。

それを横に転がって避けるとすかさず体勢を立て直し、再度腕を振りかぶる。

「なんのこれしき！ ストロングストレート！」

幹也のあほさかげんに頭を痛める武人と藍だった。そんな中ハラハラさせる幹也の攻撃は続いていた。

・・・(藍)

怖い　　気持ちの悪い巨大なミミズ、そんなありえるはずのない化け物が目の前に居て、私達に襲い掛かっている　　怖い。

　　一歩間違えば殺される状況　　味わったことなどあるはずもない恐怖にただ混乱する。一歩間違えば　　幹也が血にまみれて倒れこんでしまう、絶望的な死のイメージが私の心を埋めていた。

　　幹也と巨大ミミズとの戦闘が続く中、恐ろしさに駆られ剣を抱いたまま動けない。そんな私に、岩の上からまるで状況に合わないのんびりとした口調で武人が話しかけてくる。

「さてと、藍ちゃん。どんな状況に見えるかなあ？　一見動きの遅い相手に幹やんが押しているようにも見えるけど。ちなみにあいつは【土縄】っていうモンスターで体液が強酸なんだよねえ」

　　次の瞬間、突然幹也の絶叫が聞こえた。

「うああ！」

　　幹也の服に少しだけ酸のしぶきが飛んだようだ。あたふたと土縄から距離をとり、またすぐさま攻撃を再開する。

「負けるかあ！　俺が戦わないと、皆が　　っていうか藍が危ないんだ！　おい！　巨大ミミズ俺と一対一で勝負だ！」

無謀ながらも幹也は私の為に戦ってくれている。そんな幹也に対して私は何もしていない、それどころか迷惑に思われてもしかたがないようなものなのに……

幹也はいつでもさりげなく私を見守ってくれている、それなのに私は……

幹也の剣が土縄の体に何度も突き刺さり、そのたびに返り血を浴びそうになる。もはやいつそうなってもおかしくない状況になっていた。

徐々に死に向かって近づくと状況に涙で目がかすむ、力も度胸もない私はただ見ているだけしかできないのだろうか？

「助けなくていいのかい？ 幹ちゃんそろそろ危ないよぉ？」

私は短剣を胸に抱いてどうしていいか分からずにいた。

（出来るのならこんなものを使うような事態にならなければよかったのに……）

無意識にそう考え出した自分の思考をストップさせる。

（違う……戦わなきゃいけないんだ！ 私のせいで幹也が危ない目にあうなんて嫌だ！ 私も ）

不意に抱いていた剣が熱を帯びて輝きだす。

「何これ……？ 蓮のレリーフが光ってる」

「やあっとやる気になったのかい。まったく手がかかるねえ、剣が戦いたいって言うてるよぉ。あとは藍ちゃんがどうするかさあ」

促すように武人が敵を仰ぎ見る。

私は心を決めて剣を握り直し、腰の辺りに構え土縄に向かって一直線に走り出す。

「うあ　　！」

私の中で何かがはじける。恐怖を押し殺して大声で叫びながら、薙ぐように斬りつけて走り抜ける　瞬間、剣から炎が走り敵を包み込んだ。

「まだ終わってないよお！」

全身を炎に包まれた土縄が私を狙って振り向き、首をもたげる。その隙について幹也が後ろから傷口をなぞるように切り裂いた。

「熱っ、マジで！　ちょっと勘弁してくれ〜」

幹也が手をぱたぱたと振りながら敵から離れると、雄たけびと共に敵が光に包まれて消えていく。

その場でへたり込んだ私は　場違いにも消えていく光が綺麗に思えた。

「どうだったあ？　初めての攻撃の感想は」

いつの間に岩から下りてきたのか、武人が後ろから声をかけてきた。

気分を壊す眠たげな声に何故か腹が立ち、私は武人を睨みつける。

「怖い怖い。そんなに睨まないでくれよお、こつでもしないと始

まらないだろお？」

始まる？

確かに敵に向かう瞬間、何かが私の中で壊れるような感覚があった。それと同時に何かが芽生えるような感覚。不意に睨んでいた目から涙が零れ落ちる。

（私は何を泣いているんだろう？ 何で涙が出るんだろう？）

私は零れ落ちる涙をぬぐうこともせず、立ち上がって幹也の顔をじっと見つめる。

「どうした？ 藍、大丈夫か？」

幹也は心配そうな顔で私の顔を覗き込んできた。そんな幹也の頭を抱え込むように抱きしめて無理やりにキスをする。幹也は私の突然の行動に目を見開いて驚いている。

「これからも頑張っていきましょうね……」

私は涙を流しながら微笑みかけた。

幹也が理解できずに固まっている中、武人は意味深に頷き歩み始めた。

「さあ、私達も行きましょう！」

私も武人の後に続いて歩み始める。

「ちょっとまってくれよ」

我に帰った幹也もあとに続いて歩き始めた。もっと強くならな

やいけない……そんな気持ち私の胸にあふれていた。

・・・幹也

湖に向かって歩き続ける俺達、先ほどに倒した土縄や最初に出会った猪男など、モンスターの話で盛り上がる中、次第に俺の心に靄が掛かり始めていた。

現実起こりうる事の無い魔法や武器の効力、それに猪の顔を持ち身長二メートルもある大男、もしも生身の人間がまともに戦ったら勝てる要素はないことはわかりきっている。

剣で突き刺しても死なない土縄や、猪男に関してはそこいらの木をなぎ倒す程度の腕力がないはずもない、たまたま倒せた藍とタケがいただけの話だ。今の俺が敵を倒せる可能性はあるのだろうか？
呆然と立ち止まってもの思いにふける俺。

俺は後ろ腰に納めている剣を手に取り眺めた。買ったばかりの新品の剣は、土縄の体液を浴びてボロボロにさびびっていた。

「幹也、どうしたんですか？」

「そんな落ち込むことないってえ、幹やん。力を手にいれば幹やんだって一人で敵を倒す事ができるよお」

その武人のセリフに、心の中にいくつもの疑問が浮かび上がった。そもそも今まで生きて積み重ねて来たものまで捨てて得る力ってなんなんだ？

一生この世界で暮らさなきゃいけないのか？
帰ることは本当にできないのか？

俺は俯きながら、自問自答する。

「突然どうしたんですか？ いつもの幹也らしくないですよ？」

俺らしくない？ 確かにその通りだ……

熱しやすく冷めやすい俺

常に明るく細かいことを気にしない俺

心の中にある難問は投げるか導き出す俺

確かに今までの俺ならこんなに思い悩むことはなかったはずだ。

前の俺なら細かいことを長い時間を掛けて考えないし、なんとかなる！ という気持ちを常に持っていた。平常心を保ち続けたはず……このままでは俺じゃない。

「イヤ、なんでもないよ。それより藍こそ怪我しなかった？ あの効力は危険だよ、一歩間違えれば藍に被害が及ぶかもしれないよ」

俺は心配かけないように言った。

「大丈夫ですよ。そもそも武人がこの武器を選んでくれたおかげで、私達だけで倒す事だってできたんですから」

「そうか、ならいいけど無理はするなよ」

「わかっていきますよ、私も武人や幹也にばかり迷惑かけられないですから」

藍はそう言っただけで俺に笑顔に向けた。俺もその笑顔に微笑み返して置いた。

俺とタケに心配掛けないためか……

タケはこの世界を俺らより知っていて、もともとこの手の類にのめり込んでいたから馴染めるのは解る。

俺も多少なりともタケみたいにこの世界に馴染まないといけなのかもしれない……

しかも今から悪魔との契約をしなくてはならない 相手は悪魔、それなりに接しないと食われるかもしれない。俺は悪魔に襲われているところを想像した。……身震いする。

今からその悪魔と契約するわけだが、俺の捨てるものなんていくらかでもあるが、大切なものはさほどないと言いつける。武人のような効率のいい能力を思い浮べればいいのだが、どうすればいいのかわからなかった。

知っていることといえば、大事なものを捨てることにより強い力を得れること。これは、生半可な気持ちでは意味がないということも解る……

何を捨てて何を得ればいいのか……

思考が迷宮に迷い込んで暗い闇に沈んでいった……こんな俺じゃない！

第三章 4 (第三者)

未知に触れて(後書き)

やっぱり分かり難い……ですかね。文章の途中で視点を変えるとか
アリなんだろうか……

強くならなきゃいけない。その感情が私の心に深く刻まれている。二人の邪魔にはなれない、そのためにはもつと力が欲しい。

そんな事を考えながら山の麓の暗い森を無言に進んで行く私達、不意に武人が話しかけてきた。

「間もなく悪魔さんとのご対面だあ、心の準備はいいかい？」

……いいはずが無い。恐ろしいモノ、そんな印象しかない悪魔とこれから対面するのだ、正直怖い。それでも私は力が欲しい。そこまで考えたところで、ふと重大な事を思い出した。

「そういえば私どんな力が欲しいのか、何を捨てるのか全然考えてないです」

武人は驚いて立ち止まる。と思えば何事か考える仕草をしてまた歩き始めた。

「まあそうだろうねえ、正直一晩で考えついでここに来たなんて期待しちゃいけないさあ。あいつを見て話を聞いて、ゆっくり理解しなよあ」

そこで始めて、いつも飄々としている武人が緊張している事に気がついた。

始めて見る武人の動揺に、私にも一層の緊張が走る。

「見えてきたよあ」

暗闇が支配する森に光のカーテンが掛かっているように、前方で森が途切れている。

カーテンをぐぐり広い湖の広がる窪地に出ると、先ほどの森の中とは一変して冷たい空気と耳に響くような静けさが私達を押し包んだ。

「さてさて、いらっしやいますかねえ？」

想像していた悪魔よりも腕がとても長い奇妙な姿の悪魔の像が立ち並ぶ湖の畔。武人が呟くように言った瞬間　突如目の前にある悪魔の像の上に乗ったく同じ姿の悪魔が降り立った。

「きゃあ！」「うお！」「……………」

突然の登場への驚きとその悪魔の異様な姿、そして背筋が凍るような威圧感を感じて無意識に体が固まる。

「我に用か？　人間の子」

重苦しいほどに低い声で悪魔が問いかけてきた。固まって反応できずにいる私達をよそに、武人が話し始める。

「お久しぶりでございます、クドネシカ卿。今日は俺と同じ境遇の二人を連れてきましたあ。どうかあこの二人にもお、契約のこ」

「五月蠅い！　貴様の口調はどうにも気に触る！　後ろの二人、前に出て来い！」

足が踏み出せない……私は固まって動けずにいた。ふと幹也に手を握られる、やさしく力強い手の感触に、私は少しだけ緊張が解け

るのを感じた。意外にも幹也の表情に動揺は見えず、クドネシカ卿と呼ばれた悪魔に向かって踏み出す。

「大方の事情はそ奴に聞いておる。だが我ら魔族との契約において力を得るためには、汝らの常軌を超えた覚悟がいる。二人に問う……何がために力を欲する。生きるためか？ この世界のためか？ それとも元の世界に戻るがためか？」

……え？ 元の世界に戻るため？ 帰れるの？

「元の世界に戻るため？ ちょっと待てくれ、どういふことだ聞いてないぞ！」

「私達……帰れるんですか？」

思いもよらない事態に啞然としてしまう。肝心の武人すらも虚を突かれた表情だった。

「はっ……貴様らそんな事も考えずにここに来たのか？ そ奴が以前に別の世界から来たと言っておったからには、そのための力でも考えてきたのかと思っただが、買かぶり過ぎたかのう」

嘲るようなクドネシカ卿の口調に恥ずかしさがこみ上げてくる。だって、帰れる何て思っただけでなかったんだから……私の前に幹也が一歩踏み出した。

「どうすれば帰れるんだ！ 教えてくれ！」

「さて……残念だが、我はその答えを持っておらぬ。だがお主ら本当に考えもしなかったのか？ 呆れたものだ。単純な事だろうに

……来る事ができたのだ、帰ることもまたできよう」

私は啞然としてしまい答えることもできないでいた。幹也と武人も考え込むように口を閉ざしている。

「それでなければ、そう考えたものと思い、その考えを断ち切りたいがために考えていた私の悪戯心が無駄ではないか」

唐突に見せるクドネシカ卿の思いもよらぬ呆れた一面に私達三人はさらに愕然となる。

「空間移送は人間如きの代価では及ばぬ、夢想転移は肉体がついていかぬ、世界を変えるなど我々では力がおよびぬ 久々に楽しく構想していた私のそんな考えを……どうしてくれるのだ！」

突如怒鳴られて。また体が金縛りのように固まった。取り繕うように幹也が慌てて答えた。

「ちよ、ちよっと待ってくれ！ 俺達も色々考えたいことが……」

「私も、頭が混乱して、何が何だか……」

動揺を隠せない私と幹也、それに引き換え一人冷静な武人が取っつけたような似合わない丁寧口調で話を進める。

「整理して伺いますがあ、帰ることは出来るだろうが帰る術はわからない。さらには帰る力を得る事は出来ないってことでございますかあ？」

「そう言っておろつが、この馬鹿どもが！ その程度の考えで我と

相対するなどとは　　我をなめておるのか？」

次第にクドネシカ卿の空気が冷ややかに変わっていく。それを察したのか、幹也が突如膝を付き、頭を下げる。

「クドネシカ卿には無礼だとは存じますが、一日待つてくれませんか？」

「一日か……いいだろう、機会を与えてやる。だが次にもし降らん事をぬかしたら命の保障は無いと思え。それが嫌なら今一度己を見つめ直し、考える！」

「すいません、ありがとうございます。俺達のご無礼にも寛大な心で対応してくださいます。感謝します。その代わり後日にはクドネシカ卿の度肝を抜いて差しあげます」

そう言つて幹也はクドネシカ卿に微笑んだ。幹也の思いもよらぬ発言に驚くクドネシカ卿、そしてそれ以上に私が驚いた。

「ちよつと幹也、何言つてるんですか！」

不敵にして不遜。いつもと何か違う幹也に戸惑う。

「よく言つた！　期待しておるぞ」

高笑いするクドネシカ卿をよそに、身を翻し歩き始める幹也、私達はそれに続いて湖をあとにした。

誰もが無言のままに目的地も決めず森を歩いてた。その最中、一晩考えるという事で泊まる宿屋を探す事を幹也が切り出した。

「それならあマスターの店に戻るかい？」

「だめだ、またモンスターに襲われる可能性がある、ここは無事に行動するためにも近くの村を探そう」

「まあその方が安全だねえ、行った事はないけどおここの近くに村はあるよお、人もモンスターもいなそうな小さな村んだけどねえ」

「……私も幹也に賛成です、さっきは偶々勝てたけど、できることなら戦闘を避けたいです。私達二人には、まだ力が備わってないですし」

私は、モンスターと戦っていた時の武人を思い出し無性に腹が立った。戦いでの武人は信用できない、また手を出さず私に戦えと言うだろう。

私は武人を見る、目が合った瞬間、突っ張るような態度で目を逸らした。

「じゃあ向かいますかあ」

私達は近くの村へ向かって足を進めた。道中運良くモンスターと出会うことなくして村が見え始めた。

運命という名の時間があるのならば

止める事はできないのであろうか？

戻す事も無理なのであろうか？

その時間を少しでもずらす事が出来るのなら

歯車を狂わせれることが出来るなら

そうしたいと願う

運命への敵対心と怒り

前の町とは一変して行き交う人の姿は無く、見る限りでは建物のほとんどが空き家となっている。若い人が居たがらない閑静な田舎町というよりも、半ば廃墟のような不陰気が漂っていた。俺ら三人は特に言葉を交わすこともなく泊まれる宿屋を探し歩いたが、どこの家にも人の影は無く、聞ける人は見つからなかった。

そんな中、藍がふと立ち止まり指をさした。

「あれって看板じゃないですか？」

藍が指さした方向には木で出来た看板が吊られていた。二つある留め金の一つが外れて今にも落ちてしまいそうに風に流され、金具のきしむ音が流れている。

「たしかに店ばいねえ、入ってみますかあ」

俺と藍はタケの言葉に頷いて店に入ることにした。建物に入ると古びた木の床がギシギシと鳴り、今にでも抜け落ちそうな造りだった。辺りには明かりが灯っておらず、唯一の明かりは外の光が差し込んでいる窓ぐらいで、薄暗かった。まるで夜逃げをしたアパートのようだ……

俺達は周りを見渡し、呼んでみた。しかし、反響は返ってくるが、人の気配はなく、返答もなかった。

「誰もいないみたいですね」藍は声が震えていた。

「人のいる気配もない、空き家みたいだな」

「この世界での法律は知らないが不法侵入だと騒がれる事も無いだろう……」

「どうするよ幹やん、今日はここに泊まるかい？ 聞いてた以上に寂れてるところか、実質廃村の状態だけどお、ここなら野宿よりはマシじゃない？」

「ああそうだな、ここにしよう」

それを聞いて一息つくくと、武人は思い出したように口を開いた。

「それにしても、幹やんにはひやひやさせられるよお。悪魔相手にあんな事いっなんて、俺も少し考えなきゃねえ。ちよっと一人で歩いてくるよお多分朝までには戻るかなあ」

「もし気を使ってくれているのなら無理しなくてもいいよ、今日は

そういう気分じゃないし、タケも少し休んだら？」

「何の話ですか？」

藍は、鈍感で無知な女のこな故に、意味も分からず質問してくる。

「藍ちゃんには関係ないことだよ。幹ちゃんも考え過ぎだからあ、本当に考えたい事があるんだよ、色々とねえ」

「そうか、ならいいけど」

俺は藍と二人で部屋を借りることにした。タケは俺らに手を振りそそくさと外に出て行く、結局ここに宿泊するのは俺と藍だけになった。

「さてと、部屋を借りますか」

「よくわかりませんが、とりあえず部屋を見に行きましょう」

二人で部屋を一つずつ見ていくことにした。二階の奥部屋は、他の部屋と違って多少窓が大きく、月明かりで明るく見えた。

「藍はこの部屋でいいんじゃない？」

「私はいいですけど、幹也はどうするんですか？」

「俺は隣の部屋にするよ、お互い色々考えたい事あると思うしね。別々の部屋にしよ」

藍は素直に承諾してこの明るい部屋に泊まることにしてくれた。

俺は藍の部屋から出て隣の部屋に移動する。こっこの部屋は藍の部屋に比べて窓が小さく薄暗かった。部屋の窓側にはベッドと薄い布団が打ち捨ててあり、中心部分に小さなテーブルと椅子が二つあった。それ以外は何も置いていない。

ベッドに座り込んで闇夜を見つめる。俺は大きいため息をつき安堵していた。悪魔の前で冷静でいられるはずはないと思っていたから……でも意外と冷静でいられた。

悪魔といえども元々予測していた姿だったからか？ 分かりやすい姿の悪魔を目の前にして拍子抜けしたからかもしれない……

もしよくわからないグロテスクな容姿で、俺らの言葉が理解できないようなら食われていたかもしれないけど、俺が出会った悪魔は、タケと顔見知りであり俺らの言葉を理解できるようだった。そうと考えられればあとは行動や誠意を見せれば、気を悪くなるようなこととはないだろうと考えた。

「まあ、なんとか一段落終えたな」

俺はベッドにそのまま倒れこみ天井を見つめる。このままこの世界で生き抜くには力が必要、ゲームを進める上で始めから強い力が備わってあればある程度進める。この世界でも思った以上に効率がいいはずだ。強い力を手に入れば……強い力を……能力を……大切なものを……

ああああ！ めんどくせえ！俺はこの状況を恨んだ。

何で？ どうして？俺がこんな目に……運命とでも言うのであるのか、因果の定めか？ 戻ることは出来ないことは、分かりきっている。ならばいっそのこと頭の悪い俺は、この因果に対してとことん歯向う事を決意した。

帰れる可能性が無いわけじゃないけど、見つかる保障があるわけでも無い。すぐに見つかることを祈りたいけど、見つからずにつつとこの世界に閉じ込められたままになることだって考えなきゃいけない……。

人を襲う化け物や、本物の悪魔なんか実在するこの世界で……
ずっと？ 何もせずに、何も持たずに、生きていけるはずなんてないだろう……

何もできないまま、めぐるましく変わっていく状況が……怖い。
真つ暗な闇の中に一人取り残されたような錯覚すら覚える。光すらも陰つてしまいそうな、何を信じればいいのか分からない真つ暗な闇の中に……独り佇むような……

お願いだから変わらないで、お願いだから置いていかないで、お願いだから……死なないで 孤独で居られるほど、私は強くない
沈んでいくような思考を振り払おうともがいているうちに、いつの間にか隣の部屋、幹也の部屋の前に足を運んでいた。少しだけ、躊躇いながら、ドアをノックする。

「……幹也起きてる？ 入っていい？」

ああ……、とどこか気落ちしているような幹也の返事。部屋に入ると、幹也はベッドに寝そべって薄暗い天井を見つめている。そこには映っていない天上の星空を見つめるような、どこか寂しげな表情で

「幹也……今日はどうしたんですか？ なんだか、いつもと違って見えたけど……」

「変わらないさ、俺は俺だよ……」

いつになく小さな声で答える幹也。普段ののんびりとした明るい幹也とは違う、口数の少ない幹也に戸惑ってしまう。

何を思ってるんだろう、何を願うんだろう、何を……捨てるんだろう。堂々巡りする疑問を言葉にすることができない。

「帰れる方法……可能性があるんですよね？」

「その方法を見つけなきゃいけないな、でもそれを探すにはどうしたって力が必要になってくる」

「見つかるのかな……？」

考えたくもないのに口をついて出てくる最悪の可能性に、幹也は言葉を返すことなく目を瞑ってしまう。

言ってしまった事を後悔して自分で自分が嫌になる。幹也に答えを押し付けているんだ、簡単に答えられることじゃないのに

「見つけてみせるよ、自分の力で」

それでも幹也は力強い言葉で言い放った。私に言い聞かせるような、自分自身に言い聞かせるような、そんな力強い言葉は 私の胸に強く響いて、涙が溢れ出してきた。

「帰りたい……戦いなんて嫌だ……こんな世界、あんな怖い思いはしたくない」

初めての戦闘、一歩間違えば幹也が死んでいたかもしれない状況が頭を掠め、溢れていた涙が止まらなくなる。

幹也はゆっくりと目を開き私を見つめると、微笑みながら手を伸ばしてくる。その視線のやさしさに手を取ると、そのまま幹也の胸元へ抱き寄せられた。幹也の胸元から聞こえる強く落ち着いた鼓動が、私の気持ちをゆっくりと落ち着かせてくれる。

「こんな世界には居たくないよな、どんな方法を使っても帰る道を探してやるから泣くなよ藍……俺が守ってやるから」

今までに見たことの無い心強い幹也に、頭が真っ白になっていくのを感じる。

じっと見つめ合い、どこかいつもと少し違う感情でキスをして、そのまましなだれかかるようにしてベッドに倒れこんだ。重ね合う手に、絡まる指に力が入って、次第に解かれる。幹也の指が肌に触れる度に、溢れ出しそうな感情が身体を跳ねさせる。気持ちが帰ることを切っ掛けにリンクしているように感じる。

「ぐすつ……今日の幹也ちょっと格好良かったよ」

「俺はいつもカッコイイよ」

テレながら言う幹也。

その仕草に緊張が解けて、もう一度唇を重ねる。静かな村の小さな宿屋で、時間も忘れて求め合った

夜も薄く明けようかとする時間、私は幹也の腕の中で、眠れないまま物思いに耽っていた。

(これは現実なんだ、夢じゃない)

迷い込んでいた混乱と締め付けられていた緊張が解かれたからだ

ろつか、頭の片隅に追いやって、目を逸らしていた言葉が、心の中に浸み込んでくる。

（俺が戦わないと、皆が　　っていつか藍が危ないんだ！）

ぐっすりと眠る幹也の寝顔を少しだけ眺めて、腕の中から静かに抜けて衣服を纏う。

上着だけを羽織って短剣を持ち浴室へと向かう。相変わらず辺りに人の気配はない。武人はまだ戻っておらず、幹也も起きる気配は感じない。

（力があれば生きていける）

火照った身体が朝空けの冷たい空気に震える。

（体だけじゃなく　　心もね）

それでも心だけは震え上がってしまったように強く自分の肩を抱く。

脱衣所に上着を置いて右手に短剣を握り締め、壁に立て掛けられた大きな姿見の前に立ち自分の姿を映す。見慣れた自分の姿　　つ　　い数日前、自分の居た世界とまるで変わらない姿が鏡に映っている、何も変わっていない弱いままの女の姿が。

じつと鏡の中の自分の姿を見つめ、左手で髪を纏めて握り締める。右手に握った短剣を首筋にあて金属の冷たい感覚を感じながら目を閉じてく。

（いざとなったら幹也と武人が戦ってくれますよね？）

私は　　なんて弱いんだろう。変わらなきゃいけない……そんな気持ちの中心を充たしていく。

次第に右手に緊張が伝わって汗ばんでくる。深く息を吐き出して、

全身の力をゆっくりと抜いて　右手を真上に突き上げた。

ゆっくりと目を開き半ば滑稽な気分で自分を眺める。

帰る方法はまだ解っていない、それを探すには時間がどうしたつてかかるだろう、こんな世界で皆が無事に歩んでいけるとも思えない、無事であるためにはどうしたって強い力が必要になる

（自分の持つてる何かと引き換えに力を与えてくれる、そのモノに見合っただけの力を）

本当に大切なものを捨てる覚悟が……

「私もやらなきゃ……いけないんだ……」

朝日が顔を出して部屋が明るくなり始めた頃、眠っている幹也を起こさないように着替えを終えて外に出る。

涼しくて気持ちのいい早朝の空気は元の世界とまるで変わらない。気分に合わせて伸びをして身体をほぐしていると、どこにいたのか、今頃になって武人が戻ってくるのが見えた。

私に気づいて少し驚いた表情を見せる武人、それでも、何も言わずクスッと少し笑って、朝食代わりのパンと水を手渡して壁にもたれて座り込むだけ。

「ありがとう、武人」

ひらひらと手を振って答える武人の隣に座って、明るくなっていく空を眺めながら幹也が起きてくるのを待った。

少しして、準備を終えた幹也がきよるきよるしながら外に出てきた。

「おはよう幹也、遅いですよ」

手招きしながら呼びかけると、幹也は驚いた表情で駆け寄ってくる。

「どっしたんだ藍！ その髪」

「似合いますか？」

「シヨートは似合っけど……」

驚いている幹也の言葉を最後まで聞かずに、腕を引っ張って小さな村をあとにした。

第四章 1 (藍)

今を共に

本当は　いつまでもずっと一緒に居る事を望んでいるのに、すぐに離れ離れになってしまう事を恐れている。

踏み出せないままの私は　弱いんでしょうか？

それでも、やがて来るいつの日にか、別れる事が分かっている。今この時間を、少しでも一緒にいられる事を望むのは間違いなんでしょうか……

山の麓の暗い森を進んで光のカーテンを潜り、私達は昨日クドネシカ卿と出会った像の前に立つ。心を落ちつかせるように深呼吸をして、幹也がクドネシカ卿を呼んだ。

「約束を果たしに参りました！　クドネシカ卿はいらっしゃいますか？」

「……何所を見ておる」

突然後ろから声をかけられ、私達は驚いて振り向いた。昨日とは違う石像の上、昨日と同じ姿でクドネシカ卿がそこに居た。

「何を驚いておる、別にそこが定位置と決まっている訳ではないだ

るつに。そんな事よりちゃんと真面目に考えてきたのか？」

「もちろんです。頂いたチャンスを無駄にはしませんよ」

堂々と言い放つ幹也。

幹也は何を捨て、何を得るんだろうか……出来るのなら変らないありのままの幹也でいて欲しかった。そんな事は出来るはずもないって分かっているのに……

「いいだろう、契約は一人ずつ執り行う。どちらが先に行くか決める」

幹也が私に目をやる。私が少し塞ぎ込んでしまった事に気づいたようだ。

「俺が先に契約する」

怖じることない幹也の言葉　こんなこと考えてちゃいけない、
変わらなきゃいけないんだ。

「分かった……ならば向かおうか」

そう答えたクドネシカ卿が、いきなり石像から飛び降りて音も無く静かに水面に立つ。

驚く幹也と私を見て、わざとらしく驚くクドネシカ卿。

「何を驚いている？　相手を考える。前回の二の舞か？　まったく、ついて来い」

すたすたと湖の中央に有る黒い柱へ向かって歩き出す、幹也が戸

惑った表情で武人を見ると、武人は静かに頷いた。

恐る恐る水面に足を伸ばす幹也　乗れた？　戸惑いを打ち消すように頭を軽く振って足を進める幹也。

そのまま数十歩も歩いただろうか、急に幹也が転んだように水に落ちた。

「……………」

「何を遊んでいる？　さっさと来い」

クドネシカ卿は何も起こっていないとばかりにすたすたと歩を進めていく。幹也はバタバタともがいたあと、それを追って泳いで進む。

「俺の時はあんな事無かったけどねえ。前回怒らせた仕返しかなあ？」

「……………先に行かなくて良かったです」

幹也が柱に触れると、幹也とクドネシカ卿が柱に吸い込まれるように消えていった。

「消えた……………」

「湖の下にクドネシカ卿の魔境があるのさあ、俺も始めて行った時には驚いたけどねえ。あの柱はそこに繋がっているのさあ」

「魔境ですか……………」

よく分からないがそういうことらしい、武人の言葉　オタク用

語とでも言つのだらうか、時折私の理解を超えてしまう。そのまましばらく待っていると、私達の前にいきなり表れるクドネシ力卿。

「貴様の番だ、ついて来い」

「幹也はどこに行つたんですか？」

「そう心配そうな顔をするでない、あそこから帰るには少し時間が掛かるのだ」

言い放つと、またも柱に向けて歩いて行つた。

私も恐る恐る水面に足を踏み出す。乗れた　氷の上に立つ様な硬い感触が足に伝わる。いつ落ちるかと警戒し一歩一歩慎重に進む。幹也が落ちた辺りを過ぎる、もう少し　と、手を伸ばした瞬間、落ちた。

「このタイミングですか……」

「二人ともはしゃぎ過ぎだぞ、真面目にやる気ないのか？」

昨日の一件といい今日の悪戯な一面といい、恐ろしいだけでしかなかったはずの悪魔の印象が片つ端から崩されていく気がする……。呆れながらも少し泳いで柱に触れる。引き込まれるような感覚に見舞われ、気がつくくと重たく冷たい空気の充滿する薄暗い空間の中に立っていた。足の裏に伝わる感覚からしても、見えてはいないが床は確かに有るようだ。　どう見ても天井は無い。空間を空気の幕で覆っているのか、湖に反射する光が遥か頭上で輝いている。だがその境界が分からない、水の中で息をしているのだろうか？

「ここが我が魔境なり」

少し離れた暗闇の中からクドネシカ卿の姿が現れる。石像の上に座っていたままの姿で、何も無い中空に座ったまま。

「魔境……？」

「そう、我ら魔族と呼ばれる種族が自分達にもっとも適した空間、それが魔境だ。我らと契約を結ぶ上でこれ以上の場所はあるまい」

……言葉の大半が理解できない、唯一確実に分かった事といえばオタク用語では無かったらしいという一点ぐらいだろう。

「つまりここで契約する訳です……よね？」

「ふっ……まあいい、お前らには知識として必要なものでもないだろう。それで？ 貴様はどんな能力を望むのだ？」

「私は……ごめんなさい……嘘を付いていました。本当にどんな能力を手に入れたのか分からないんです。ただ……それでも幹也達の力になりたいんです。そのためにどんな力があればいいのか、私にはわからないんです……」

「……お前はどうしたいのだ？」

「わかりません……」

クドネシカ卿があからさまにため息をつく。

「話には聞いていたが、本当に人間というのは自分の意思とは裏腹に答えを導きださない者が多いものなのだ。まったくもって……」

困った種族だ」

「だって私は、戦いと無関係な普通の人間ですよ。幹也達と一緒に強くなつて戦いつていきたいんですけど……想像がつかなくて」

「ふむ……ならば力に関してはひとまず置いておこう、順序が変わってしまうが仕方あるまい、契約で力を得るために必要な代償は決まっているのか？」

捨てるものだけは心に決めていた、強い能力なんかじゃ無く、私の望む結果を得るために本当に大切なものを捨てる覚悟 矛盾しているのだろうと自分でも分かっていたいながら、

「その前に一つだけ教えてください。帰る手段は何かあるだろうと言っていました、今のままの私達でそれを見つけることが出来ると思いますか？」

「不可能だ」……きっぱりと言う。

「単純に貴様らは弱い。生きていく事すら困難な者達が、それ以上のものを望んで叶うはずがないだろう？ 生きるだけではない、どんな事をするにも力は必要だろう？」

「やっぱりそうですよね……だったら、他の人達が 幹也が帰れる可能性が見つかるのなら、私がそれを手に入れるための力の代償に【私が元の世界に帰ること】を捨てます！それでは足りないでしょうか？」

クドネシカ卿は考え込んでいるのか、しばし黙り込んでから静かに答える。

「本当に理解しがたいな……人間と言うものは」

そこで言葉を切ると心の中を覗くようにじっと私を見据えてくる。

「……いいだろう、ならばお前の能力は私が決めてやる」

「……………えっ？」

少なからず強い力のヒントを得られないだろうかと思っていたのに、そんな思いもよらない事を言われて驚きが隠せなかった。

「心配は及ばん、お前のその望みに、その覚悟に対する価値のある力だ！ 我ら魔族にも我らに仇なす神族にも使いこなせぬ、人であるからこそ強き力となる能力だ。使いこなしてみよ！ 我にお前の生き様を見せてみよ！」

いきなりクドネシカ卿の長い腕が私の頭を掴む。

「強く想え。お前が帰ることを捨て、どうなるのかを想像しろ！ 下手な事は考えるな、代価を詰まらん考えで安くするなよ！」

異議を答える間も無く無理やりに始められる。私は動揺している気持ち無理やりに抑えて言葉に従った。

（元の世界に帰れなくなる……何も分からない世界で生きていかなきゃいけない、家族や友達とももう会えなくなる。それに 幹也と離れ離れになるんだ……ずっと、もう会えなくなる。そんなのはイヤだ！）

「……いいぞ。強い負の感情が、闇の糧が伝わってくる。想いを切り替える！ これほどの負の感情を捧げてまで達成したい想いは？ お前は何を得る！」

（力を得る事で弱い私を捨てて一人の力で戦うことが出来る、幹也達を無事に本当の意味での現実に戻してあげたい……、いつか離れるその時まで……幹也と共に歩んで行く……幹也を守りたい……）

「何度も繰り返し思い続けろ、繰り返す事が力となる。何があろうとも強く思い続けるのだ！」

不意に体から力が抜ける。クドネシカ卿の手が離れ私は床に崩れ落ちた。

「役目は果たした、だがこれだけは忘れるな。我らの力は繰り返す事で強くなる。それを心に刻み込め」

私は自分の体に目をやるが、何所とも変化は見られない。

「どんな力なんですか？」

「それは自分で考えろ、貴様ならではの力だ」

「そんな……クドネシカ卿、それはどういう意味なんですか？」

答えも無くクドネシカ卿が何も言わず姿を消してしまふ。

私ならではの力……？ 私なんかにどんな力があるって言うんだろ……

「手に入れた力を試すといい」

クドネシカ卿の声が頭に響くと同時に、膝に当たっていた冷たい感覚が消える。

(今日はよく落ちる日だな……)

下を見ると地面らしきものが見え始めた。軟らかい感触を全身に受けて、私の体は雪に似た冷たい弾力のある床に埋もれた。顔を上げて辺りを見渡す。よく目を凝らしてみると、暗い洞窟のような空間で岩肌が微かな光を放っていた。

「ここは……？」

立ち上がるうとして手を床につける、手には今まで感じたことのないような生暖かさを感じた。

「……………？」

手を見てみると青黒色の液体が染めていた、そのまま視線を下げて床を見ると、顔が大きく体が小さい黒い翼の生えた死体がそこらじゅうに転がっていた。

「　　っなんなのこれ！」

その中から弱々しく立ち上がるうとする頭でっかちの蝙蝠モドキが私を睨みつけた。

「私何も……してないから……ね？」そう告げながら後ずさりする。

「グギギギ　　」

ぐもった鳴き声を尻目に、私は慎重に相手から体を離して立ち上がると、急いで方向転換して駆け出す。

「ギューー！」

一匹のモンスターが追いかけてくる、体が弱っているのか私に追いつけていない。焦りから開放され始めたとき、周りに蝙蝠モドキと同じ生物が青い液体を流しながらそこらじゅうに転がっているのが見えた。よく見ると顔がない者や翼が折れている者、下半身がない者までいる。

「これ 幹也がやったの？」

私の前に幹也が来ているはず、契約の力で能力を身につけて倒したに違いない。

私はここで逃げているだけ 駄目！ これじゃ前と変わらないじゃない！ 立ち止まって振り返る。蝙蝠モドキは奇怪な声を鳴らして向かってくる。

私の力が何なのかはわからないけど、それでも戦わなきゃいけないんだ……

短剣を横に構え刃を敵に向ける、とりあえず突き刺すことだけを考え、腕を勢い良く伸ばした。短剣 がモンスターを貫き、叫びと共に動きが止まった。

「はあ…… はあ…… 倒せ…… た？」

変わらないもどかしさと悔しさを押し殺し、短剣を握り締めてさらに奥へと足を進めた。

薄暗い空間に次々と小さな光が灯り始める。今に始まったことじやない、それでも戦いなれてきたせいも、恐怖を感じられなくなっていた。だからといって油断はできない、周りには無数の敵がいる。背後の敵も意識しなくてはならなかった。

「きりがいな〜この力も持久戦には向いてないみたいだし……失敗したかな〜」

ジリジリと狙われ一匹が襲い掛かると同時に一斉に動き出した。

【時差力】を放った。その瞬間辺りがセピア色に変わる。俺の感覚器官にズレを作って、すべてがスローモーションに見えるこの力は、能力によるものだ。

だが体の動きが思考についてこないために、自分の動きも遅く見える。その作用によってどうにも扱いにくい、それでも先手を打てる事で優位に立てることがこの力の良さだ。

ゆっくりと流れる時の中で何匹かが先頭になって襲い掛かってくる。右と左の敵を切り払おうと、拘束されているかのように動きにくい腕を払う、横に流れる剣が徐々に敵の体に切り込み、青黒とした液体が剣に付着してゆく。

次は 剣に映った背後にいる敵に気づく、前の敵はまだ射程範囲に入っていないことを確認して、後ろの敵を討つ

俺はそう頭を使いながらスローモーションの世界の中で次々と敵を討っていった。

……ふと前から来るはずだった敵が視界から消えたことに気づき目線を落とす、コウモリもどきは足元に移動していた。上の敵を意識しすぎて足元に移動していた敵に気がつけなかったのだ。

失態だ 反射的に体を横に傾け、足元の敵を蹴り飛ばそうとするが、鉛を埋めているかのように足がすんなりと上がってくれない……本来なら一瞬でしかないはずの行動すら、すんなりといかないもどかしさに苛まれながらも、徐々に敵に向かって近づくと足の動きを意識しながら思考と視界を動かす。

蹴り上げた次の行動は……次に近い敵は前から来る奴らか、だつたら……

ゆっくりと敵に近づく足の角度を少しずつ変えていく。ついに足の甲は敵にめり込み始め、次第に敵は後ろに飛ばされていく。その背後から向かってきていた五体に向かって……

敵の後ろに控えていた五体は巻き込まれ、重なり合って壁に激突。鈍い音が洞窟に響き渡ったような気がした。敵の動きが一斉に止まる。辺りに色が戻って息を切らした。

「敵の数が多すぎる……」

絶え間ない戦闘で、体と脳に疲労が募っていた頃、俺を呼ぶ声が聞こえた。

「幹也！ しっかりして」いつも耳にしている声。

藍は敵を掻い潜り俺の背後についた。話しかけようとした瞬間、敵がまた一斉に向かってきた。少しは休ませろって！

【時差力】を放った。辺りがセピア色に変わる。背後の藍に目をやると短剣を腰に構え敵から目を逸らさない、強く勇敢な眼差しをしていた。どんな能力を得たんだろう？

変わった形跡はまるでなかった。それでも、どこことなく印象が前と違うことに気づく、髪型が変わったからかもしれない。いや違う、恐らく藍の中で何かが変わったからだろう。

俺は視線を前に戻して敵を倒していく、剣を突き出した瞬間、死

角から一匹だけそれを避け突っ込んできた。その時、俺の顔を横切る蓮の様子が視界に現れた。その短剣は俺の目の前の敵に向かい突き刺さった。

後ろを振り向くと藍が敵を睨みつけている。あどけなさの消えた戦士の目とでも言うのか。変わったな藍……

そんな藍の背後に敵が迫る。俺はすぐさま伸ばしきった腕をそのまま後ろに振り払い、藍の頭上を掠めて敵を上下に分ける。藍の視線は常に敵を見据え、逞しく思えた。

俺と藍は即興とは思えないような連携プレイで蝙蝠モドキを薙ぎ払って行く。藍は心強い味方だった。気がつくとも最後の一匹を、藍が斬り払って辺りが静まり返った。俺は力を解き視界の色が戻る。

息が上がる中……ふと質問しようとしたが「多分その聞き方は失礼ですよ」「そう言った藍の一言が開く口を押し留める。俺は気持ち落ち着かせ、藍の手を握り駆け出した。駆け出した先は出口。光が大きく俺達を包んだ。

洞窟を抜け出したそこは一面の森だった。見上げると生い茂った葉の隙間から日の光が幾重にも射し込んでいた。そんな森の中を、後ろからまたもや奇声が聞こえる。

遠くの方には岩と土だけで作られたとても古い建物が見えた。俺たちは古い建物に向かって又走り始める。そこにはクドネシカ卿の石像に似た柱が見え、黙々と走り続けた。

行く手にはやたらと手が長い毛むくじやらのモンスターが何匹も現れた。そいつらは躊躇なく攻撃してくるが、俺は藍を追い越し猿もどきを斬り払い一瞬の間も置かず走り続けた。藍も敵を払いのけ足を休ませない。

「痛っ」藍は左腕を抱え顔を顰めた。

「大丈夫か？」

「うん、平気……」

藍は俺に心配をかけないようにしているのか、強がっているような顔を見せ、ひたすらに走っている。もう少しで柱に辿り着く所まで来た。俺は藍の手を引き、腕を伸ばした。柱に触れた瞬間、引き込まれる。

気がつく俺と藍は湖の畔に居た。辺りを見渡すと湖の柱の石像が立っている。ここが元の湖だという事が分かった。

「思ったより遅かったが、なんとか無事に出てこられたようだな」

いつの間に現れたのか、後ろの石像の上にクドネシカ卿がいた。

「あ奴なら対岸で寝ておるぞ。湖にもここから流れ出る川にも橋は無い。泳いで渡るか、湖の上を渡るかどちらにする？」

「また落とされたいんですたら、できれば上を渡らせてもらいたいですけど」

そういえばさっきまでは緊張していて気づかなかったけど、藍の服もよく見るとずぶ濡れだった。藍も落とされたのか、ふいに落とされた藍を想像し、笑いがこみ上げてきた。

「安心しろ。お前らには満足な答えを返してもらった。もう頭をほぐしてやる必要も無いだろう、対岸で待っておるぞ」

そう言い残してクドネシカ卿は対岸に向けて飛び去ってしまった。

「ホントにあれを考えてやってたのか微妙だけど、どうする？」

「信じるしかないんじゃないですか？ もう既に泳げる状態じゃないみたいですし」

長い戦闘とクドネシカ卿のとめどないドッキリに疲れた表情で藍が答える。足を進めると確かに泳ぎたくても既に水に入れなかった。

「ありがたく受け取るしかないか」

俺達是对岸に向かって疲れた足を引きずるように進んでいく、新しく手に入れた能力【時差力】は、戦闘には向いているのだが、その分脳への負担が激しかった。その上無理に体を酷使するため戦闘が終わった今となつては、体がだるく力が入らない、連戦でも使えるように訓練しなければ

「お二人とも随分疲れてるねえ」能天気話すタケだった。

「タケは寝てた分元気なようだな」俺は皮肉を込めて言った。

タケが少し動揺した口調で答える。

「何言ってるのぉ、これでもうまくいったのかちゃんと心配してたんだよぉ」

「よく言うよ、ロープの首元に葉っぱが乗っているぞ」

慌てて払うタケをよそに、藍がクドネシカ卿に質問した。

「クドネシカ卿、何か帰る為の方法に心当たりはありませんでしょ

うか？」

「呆れたものだな、力を与えたところで性格は変わらないのだな貴様らは。遠慮という言葉をいい加減に覚えたらどうだ？」

藍は恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「すみません、ただ何か手がかりでもあれば少しでも帰る方法に近づけるかと思つて」

クドネシカ卿は何か考えているのか、柱の石像を眺めている。

「……確証の無い話だが、それでも聞きたいか？」

「構いません、教えてください」

俺達はじつとクドネシカ卿を見つめる。

「この世界には秘法や秘術といった【封じられし力】というものが存在する。我と交わした【等価契約】もその一つだ、もしかしたらその中にお前達が帰る為の役に立つものがあるかもしれんが……」

語尾を曖昧に言い淀むクドネシカ卿に、タケが飄々とした口調で問いかける。

「それでえ？ その封じられし力についての情報はあ？」

「秘法、秘術、秘伝、その名の通り秘められておるものを知るはずがあるまい」

「やっぱりねえ、そう簡単にはいかないと思ったよお」

「ふっ、そう悲観する事もあるまい、魔族の封じられし力については情報が集められる。後は神族の情報と人間の情報だけだ、三分の一は出来たと思えば少しは気が楽であろう」

「確かにそうですね」嬉しそうに顔を綻ばせる藍。

「随分と大きな枠での三分の一だけだな」

「まあ気長に行くしかないんじゃないのお？」

三人でやれやれとため息をつく、やっぱり簡単にはいかなかった。

「それにしてもクドネシカ卿、能力や情報等いろいろとお世話になりました。本当にありがとうございます」俺は深々と頭を下げる。

藍も続いて頭を下げた。

「本当にお世話になりました。それに魔族の情報まで集めて頂いて、なんてお礼を言ったらいいか……」

「誰が教えてやると言ったのだ？」

「え？」「は？」「……」突然の言葉に三人が固まる。

「何故我が貴様らのために動かねばならんだ？ 我に何の得がある」

唐突に変わったクドネシカ卿の雰囲気違和感を覚え、少し慎重

に聞いてみる。

「じゃあ、どうすれば教えて頂けるのですか？」

「どうすればか、そうだな……」

クドネシカ卿は考え込むように目を瞑った。俺達はクドネシカ卿の言葉を待つために、しばらく時間を待つ、そして

「我を認めさせてみよ！」

クドネシカ卿を認めさせる？ 俺には言葉の意味が分からなかった。俺はもう一度だけ尋ねることにした。

「認めさせるにはどうしたらいいのですか？」

「その程度はお主らで考えよ、これ以上我に問うようならば」

俺はまずい！ と思いクドネシカ卿の話に被せて告げる。

「わかりました！ 自分達で考えてみせます、それまでクドネシカ卿を待たせるかもしれませんが、待っていてもらえませんか？」

俺は深々と頭を下げる。タケと藍も俺の行動に察して頭を下げた。

「よかろう、暫く待っておるぞ、心して励むがよい」

クドネシカ卿は高らかに笑いこの場から消えていった。

クドネシカ卿が去ったのち、俺達はマスターのBARに戻ることにした。

「ところで幹ちゃん、クドネシカ卿にあんなこと言って大丈夫う？」

「まあ仕方がないさ、元々悪魔を頼りにすることが難しいことだし、とりあえず今は旅をして情報を集めよ、藍もそれでいいよね？」

「そうですね。私達は力を与えてもらいましたし、自分達でも何か行動を起こさないと何も始まらないですから……クドネシカ卿の情報、保険としておきましょう」

俺は驚く、藍は前向きになっていた。俺は前以上に心が揺さぶられているのを感じた。

『遙かなる過去、太祖たる神々と悪魔は悠久と呼べるほどの膨大な期間を互いに争う事に費やしてきた。双方に多大な犠牲を出しながらもどちらも譲る事無く、均衡した戦況の中互いに少しづつ疲弊していった。』

どちらかが滅びるまで終わらないであろう事は誰もが理解していた、同時にこのまま続ければどちらが勝利したとしても、その頃には支配する力が残らなくなっているであろう事にも誰もが気づいていた。

それでも対となり相対するものが一つの世界に共存する以上、そこに平和が訪れる事はありえなかった。

そんな長く長く続いた争いも次第に終盤に近づいた……そう、言うまでも無く双方の力がいつ消滅してもおかしくないほどにまで弱まってしまった。

互いに消滅する事で世界に平和が訪れる。しかし、当然そんな結末を望む者など神にも悪魔にもいるはずも無い、だがそこに至るまで解決策を見出す事は誰にも出来なかった。

そして遂に危惧していた状況に陥った。弱まりすぎた二つの勢力は既にどちらが勝っても支配する事の出来ないほどに力を失ってしまった。

どちらかが世界を支配することは出来なくなった、だが、分け合い共存する事が成り立つのならそもそもこんな争い自体が起きない果ては滅亡を待つのみ。その状況に至った事でようやく互いの妥協案が生まれた。

双方にとって害の無い中庸の存在に世界を統治させ、それを互いの方法で支配してしまえばいいだろうと。世界の成長も発展も……双方の抗争すらも、すべてその者達を代用してしまえば済むだろうと

そうして試行錯誤の末に生み出された存在が人間だった。人間という種の発展という前提の下に世界を統治させ、神々は信仰の下に悪魔は畏怖の下に、少しずつ人間に帰依して、その容貌も力も繁殖の方法も様々な形に変化していきました。

始祖である神と悪魔、二つの存在の思想を強く受け継ぐ者達は、人間の持たない強い力を持って神族と魔族とに別れました。

その結果 双方の思惑が重なりながらも世界は双方の利を得るものに発展していく事が出来た」

天井に黒い大赤斑だいせきはんのような渦がゆつくりと流れており、ステンドグラスに囲まれた静かな魔境で、サヤは椅子に腰掛け、古い古文書を読み返していた。

三種属の共和、古くから伝わるそんな話が、計画の軸にあった事を思い返しながら。

「それがまさか、こんな事態になるなんてね……」

呟くように言い放ち、古文書を投げ捨てる。

魔族存亡の危機 計画の発端はそんな危惧にあった。神族が魔族と人間の双方に対して殲滅線を仕掛ける、小さな小競り合いから生まれたそんな可能性。

その最悪の可能性を想定して、戦力となる存在の召喚が計画された。

種としての起源の異なった、この世界にとって異端な存在【適合者】それを使役できれば、万軍に匹敵する存在となる そんなはずだった。

それなのに現実には、数十人の上級魔族を犠牲にする結果。いくら適合者を連れてくる事に成功したとはいえ、望むべき結果だったとは言えるはずも無い。

魔族の中でもある程度、地位が高い者がこの計画に関わっていた。協調性の欠片もない魔族が しかも番人や門番のような下級魔族

ではなく、自我を確立させた上級魔族が五十人も集まることができた奇跡的な計画。

ただでさえ指揮系統も統一性も無く生きる魔族なのに、計画が破綻した以上、危惧が現実の物になりかねない。

「……計画を書き換える必要があるわね」

適合者が穴を埋めるだけの戦力になるのか、武人のようにこの世界では存在しえない力を生み出す事ができると分かった以上、万軍とまでは及ばないにしても貴重な戦力にはなりえる。

自分の以外に帰って来ることが出来た人物、それが誰なのかによつては、適合者を引き入れて統率する事も可能になる。それができれば、自己中な魔族を率いるよりも状況を好転できるのか

サヤはじつと目を伏せて、散りばめられた幾つもの点を、ありとあらゆる可能性を考慮して繋げていく。

自分の連れてきた適合者、藍達が構想どおりに成長していることを願いながら

時間に縛られない生活というのは、俺みたいな怠惰な人間からすれば嬉しい事この上ないものだ。その例を挙げるとすれば何よりもまず、好きなだけ寝ていられる事だろう。以前は休日にかき味もなかった、目覚ましに起こされる不快感の無い目覚め。それを毎日味わえるのを嬉しく思わない奴はいないだろう。

そんな様子で惰眠を貪っていた俺の身体を、不意に浮遊感が襲う。どこかに落ちるような奇妙な夢、もとい悪夢。

一瞬の間を置いて、壁に顔面から激突して目を覚ます。何事かと見上げれば、何故か驚いた様子の藍ちゃんか布団を持って固まっていた。

「えっと……ごめんなさい。起こしても起きなかったから」

予想以上に簡単に引き抜けて驚いていたらしい。

そんな騒動を経て、散歩がてらに町をぶらつきながら、目に入つた物を順に説明していく。

町に来た当初から疑問に上っていた、夜半には勝手に照らし出す街灯や、止まる事無く湧き出る町を中心に位置する水場のように、魔法による恩恵は現代技術に及ぶものがある。

対して、そういった魔法に依存しているせいか、あつちの世界に比べて科学技術の発展は遅い。

まあ考えてみればそれも当然な話だろう。生み出した者が使える者に教えれば、それだけで魔法は伝わっていく。対して、科学技術はそうもいかない。機材と技術、そしてそれを動かすエネルギーの三つが揃う前提が必要になる。

そうなればモンスターの存在が難点だろう、貿易でさえ難が出る

ような状況下で、技術交流なんてものが叶うはずも無い。鉄製品である武器の値段がそれなりに高いのも、そこら辺が要因だろう。

技術力の高いとは言い難い木造の町並みや、舗装すらされていない通りがそれを物語っている。

「……でも、そんなに科学が発展してないのに、生活するのに困ってないなんて、やっぱり魔法ってすごいんですね」

「困ってないから厄介なんだろうけどねえ……」

最低限の生活は保たれているから不満は少ない。それどころか、モンスターという危険性から守られている以上、それで満足とさえ思っている節がある。最低限の循環が保たれて、必要に迫られていないから、発展しない。

そして、発展しないからこそその問題もある。その際たるものが、統治者の不在。

政府や国家制度のような縛りは無く、曖昧な道德観念による危機管理。町に住む傭兵達による自警団程度の組織は存在しても、犯罪を縛るには至らない。一見穏やかで平和な世界に見えて、怠惰に歪んでいるようにさえ俺には思えた。

「あんまり、変わらないんですね」

「……ん？ ああ、俺はただか二年半の間しか見てないけど、大して変わっちゃいないねえ」

「そういうことじゃなくて【元の世界に比べて】ですよ。ニユースとか見ても良い話題なんて少なかったですし……歪んだ平和って言われると、似てるのかなってふと思っただけです」

……まあ、確かにそう言えない事も無いか。根本の原因は違っても、大枠的には近いものがある。
ぼけっとしてるように見えて、案外見る目があるようだねえ。

「それにしても……お腹空きませんか？」

前言撤回……本当にふと思いだっただけのようだ。少しでも見所があると思っただ俺が馬鹿だった。

「……まあいいけど、朝から何にも食べてないしねえ、適当に店でも探しますかあ」

呆れ混じりに適当な店を探して店内に入り、癖の無い食べやすい物を中心に注文していく。当然こっちの食材を知らない藍ちゃんは、何も言えず呆然とその様子を眺めて首を傾げている。

「そういえば……異世界なのに言葉は普通に通じるんですね？」

「ああ、かなり今更な気がするけど、説明してなかったねえ。俺も聞きかじっただけの話だから詳しくは知らないけど、どうやら【認識を共有する魔法】が掛かってるらしいよ。つまり」

適当にぼかしながら、沙耶ちゃんから聞いていた説明を教えている。勿論、それを誰に聞いたのかという疑問に思い至らないような言い回しで。

「……という訳で、強いて最低限覚える必要があるとすれば、貨幣価値ぐらいなもんかねえ。桁数で適当に高いかどうか判断してただろうけど、大体はそれで問題なし。後は見れば分かるだろうけど、重さと大きさの違う四種類の硬貨が、小さい順に十進法で価値が変

わる事さえ覚えておけば十分だろお」

ともすれば、藍ちゃんは困惑した表情で苦笑い。その様にどうにも先が思いやられる。

「そこらへんの事も、魔法で何とかならないんですかね？」

「そう言うだろうと思ってたけど、魔法とはいえ万能じゃないんだろうねえ。例えば、あの看板は何て書いてある？」

俺は店の入り口から辛うじて見える、宿屋の看板を指差した。

「【宿】って一言……ですよ？ でも、何だかぼやけて見え辛いですけど……あれ？ 四文字あります？」

「因みに俺には【INN】って見える。そこらへんが認識の誤差なんだろうねえ。実際は読めないけど、意味だけは分かるってところかなあ……魔法を使える人自体が珍しいから、詳しく知ろうにも難しいんだよお」

「二年半も行き来してた武人でも知らないんですか……それにしても、そんな珍しい魔法を武人は何で使えるんですか？」

投げかけられた面倒な質問に、俺は思わず顔を顰める。

俺の能力は魔法のように見える能力というだけで、実際は魔法ではなく、あくまで科学の領域を能力で応用しているだけ。それを説明するのは、正直かなり面倒臭い。

「全一・陰陽・三無・四象・五行・六道・七音・八卦……そんな前の世界にあった魔法の断片みたいなもんを、科学的に理由付けして

使えるようにしてるだけさあ。簡単に言えば、だけどねえ。重ねて言うけど、魔法じゃないよ。その違いをまともに詳しく説明してほしけりゃするけど、一昼夜じゃ終わらないけどあ？」

「いや……遠慮しておきます。なんにしても、結局私達には魔法は使えないって事なんですな……」

「極端に言えばそういう事だねえ。仮に使えたとしてもこの世界の人達と同じレベルでは扱えないんだろうし、俺達には契約で得た力があるだろう？ そっちを鍛えたほうが魔法よりは現実的なんじゃないかい？」

「鍛える方法が分かれば現実的なんですけど」

「まったく、いったいクドネシカ卿にどんな力を貰ったんだい？自分で鍛え方が分からないほどに、ややこしい力を思いついたって事お？」

「……実は」

言い辛そうに切り出された契約の話は、愕然とする内容だった。

「それで結局どんな能力かも分からずに契約したってことねえ。まあ捨てたものと等価で貰った力なんだし、捨てたものによってはそれなりに期待できるんじゃないの？」

促した質問に黙り込む藍ちゃん。その様に、それなりに大切な物

を捨てたんだろう事だけは分かった。不明とはいえ能力もそれなりに期待できるだろう。

「そんなに身構えないでくれよ。別に聞く気も無いさあ、人の心の深い所まで掘り下げようなんて無神経な事は考えないよ。大切な物を捨てるのは誰だって辛い事だからねえ。言いたくもなくなるさ。俺の場合は肉体的なものだし大して知られても困らないしねえ」

「あの時はごめんなさい……」

「別に良いさあ、知られて困るもんじゃないしねえ。まあ能力はクドネシカ卿の言い方からして後々分かるんだろうしい、当面は運動で体力を付けたら短剣での戦い方を覚えたりして強くなっていくしかないんじゃない？ 初めの頃と違って、自分から戦いに行くぐらいの心意気は備わったみたいだし」

そう言うと、藍ちゃんはそっと思索するように俯いた。

「ありがとう、って言うべきなんですかね？」

「ん？ 何の話だい？ 俺はただ見てただけだしねえ」

軽くはぐらかすと、藍ちゃんは顔を上げてじっと見つめてくる。

「……やっぱりちゃんと言っておきます。見守っていてくれてあげがとうございます。全部武人が戦ってたら私、元の世界に居る時と何も変わってなかったと思うから」

真顔で言われた台詞に、思わず破顔してしまう。律儀と言うよりも純粹と言うべきか、絵に描いたような普通さに笑いが止まらな

った。

「そういう受け取り方もあるかあ。藍ちゃんは良い子だねえ」

「ちょっと、何でそこで笑うんですか！」

怒って膨れる藍ちゃんをてきとつに宥めながら、どっちらちららに面白い展開にできるかだけに頭を巡らせていた。

こつちに来てからずっとシリアスな日々を続けてきたため、今日一日は休養する事になった。それを切り出したのが藍らしい……夕方起きた俺は、今日の予定は何も考えていない、しかし折角の休日だ、一人で町を散歩することにした。

俺らが宿泊しているマスターの店は裏通りに位置し、実はこの町の表通りを未だにあまり見ていない、好奇心に駆られて今日は表通りを散歩することにした。元々金が無い為、買い物は出来ず回るぐらいしかできないが……

表通りは行き交う人が多く、色々な人々がいた。色黒な肌をしているフリーマーケットの定員やパンを盗み追いかけられている子供、刺激的な服装のお姉様方など、見る物すべてが珍しく、俺の顔は朝の苦痛な表情に比べだいぶ綻んできた。

ふと、快活な笑い声が聞こえて視線を向けると、買出しの途中なのか大きな箱を抱えたマスターが踊り子のような服装をした女と歩いていた。

「いい女になったなあ〜メラン、結構結構!」

豪快に笑うマスターの聲がとにかく響く、地声は本よりテンションの高い時の音量は半端じゃない大きさだった。

「いいわ、クルタンの頼みじゃ断れないもの」

……クルタン?

「詳しい話は今夜にでも……むっ?」

辺りの人々と同じく呆れていた俺にマスターが気づいた。

「おお、幹也じゃないか。散歩の途中か？ あゝメラン、悪いが後ほど……に」

意味深に語尾を濁し、隣のメランと呼ばれた女性に何やら目配せをするマスター。すると、何故かメランは俺をじっと睨んでくる。

「あゝどうも、マスター、クルタンって？」

俺は膨れるメランをスルーしてマスターに問いかけてみた。

「わたしの本名だよ幹也！ 正確には《クルタランベジユ・グラデイスタガー》だが、長い上に言いにくいいため、メランが勝手に訳して呼んでいるのだ。わたしも結構気に入っている！ 幹也叫んでいいぞ！」

それを聞き、さすがにマスターを《クルたん》と可愛らしく呼べないため、今までの呼び名を使う事にした。

「そうか、残念だ」そう言って豪快に笑うマスター。

「ちょっと！ クルタンは私しか呼べないのよ、他の人には使わせたくないわ」

「メランは相変わらず、欲張りだな　それはそうと、久々のメランとの再会だ、とりあえず俺の店で三人で酒でも飲んで語ろうじゃないか！ 勿論、俺のおごりだ」

こうして俺の散歩は短い間で終わり、BARに戻る事となった。

「せっかくの休日も結局酒で過ごすのか……」ため息がこぼれた。

BARにつくとマスターはカウンターに入り、メランは俺から一席だけ空け隣に座る。俺は二人の関係を聞いてみた。

「二人の関係は、メランがマスターに相談した所から始まったそうだ。メランは昔から男に言い寄られていたみたいで、中にはストーリー紛いの事もあったらしい。困ったメランはこの町で一番の腕っ節が強いマスターの存在を知り相談を持ちかけた。いわゆるボディガードみたいなことだけど、それを聞きマスターは「君にかかわっている暇はない」と突き離れたが、それでもメランは引かず言い続けた。」

困り果てたマスターは、「自分の身は自分で守れ」と言って護身術を教えたのだそうだ。それから成長したメランは、力をつけマスターを兄のように親しみ、経済的に厳しいマスターの副業、賞金稼ぎの仕事を手伝っていたみたいだ。」

「あの時はさすがのわたしも、困った困った」

マスターは苦笑いしている。

「クルタンの寛大さは、私のハートにヒットしたのよ、正に心打たれた感じ」

「わたしもメランに、しつこく付きまとわれたから心打たれたよ」

ちよつと噛み合っていないと思ったが、話を流した。

「あついつけな〜い、待ち合わせしてたのよ、早く行かないと、ミキちゃんクルタンまたね〜」

メランは軽く手を振り足早に去っていった。

マスターとの語りは、いつの間にか賞金稼ぎの話になっていた。賞金稼ぎといっても一つに留まらず、手に入れた物を売るとか依頼されたことの報奨金などなど、色々とあるみたいで、マスターが特に行っていたのはモンスター退治だそうだ。中でもこの街に襲ってくるモンスターの大半はマスターが退治しているらしい。

この世界には警察官や自衛隊のようなものは存在しないみたいだ。

「マスターは、どんな能力を持っているんですか？」

「わたしに能力？」

「いくら体を鍛えているとはいえ、生身の人間でモンスター退治は難しいですよね？」

「ガハハハ、そんなことはないぞ幹也、モンスターにも弱点はある。例えば君が戦った土縄は動きが遅い。それに光に弱い生物もおるだろう、要は頭を使う事と倒せる力量、そして考える時間を稼ぐ体力があれば倒せるというわけだ」

俺は腰に装着している錆付いた剣を取り出した。それは土縄との戦闘を思い出させた。

「もし、マスターが土縄を倒すとしたらどうします？」

「わたしが土縄を？ ふむ、そうだな……奴らの弱点としては火に弱く目が無い。しかも触っても分からないくらいに感覚が鈍い。し

かし下手に近づくと強酸の餌食にもなる。因みに奴は相手の動きを音で判断する生物だということは解っている……だとすれば、わたしに襲ってきたならまず動かないで相手を刺激しないようにする、そしてゆっくりと近づきアルコールを全体にかけて火をつける、あとは燃えるのを待つだけだ。ガハハハ、ただアルコール代が掛かってしまうから、この腕力で締め上げた方がいいかもな」

そう言っただけで力瘤をみせるマスターに開いた口が塞がらず固まってしまった。

マスター曰く土縄は、下級の中の下級生物らしく、動かずにじっとしているとは帰っていくこともあるらしい、いわゆる金稼ぎにもならないクソモンスターだそうだ。

俺はそんなモンスターに、苦戦して剣をボロボロにされて、仕舞いには、藍に助けられたようなものだった。そんな自分の不甲斐なさに今になって愕然としてしまった。

「どうした？ 顔が暗いぞ、いつもの元気な幹也は何所へいった？」

俺は、また自分が落ち込んでいたことに気づいた。また考えすぎたな、これから強くなれば良いだけの話だ。この剣もまだ使えないわけでもないし、買い換えることも出来る。でも金が

「そういえば、武人が稼ぐためにしている、賞金稼ぎの仕事ってどうすれば出来るんですか？ 俺もそろそろ自分で稼がないと……」

「賞金稼ぎ？ それなら町の張り紙を見ればよい」

賞金稼ぎ、もとい傭兵の仕事は、たいてい町のどこかに張り出されていることを聞いた。場所によっては、それを専門に扱う店も存在しているらしく、そこに訪れるのも一つのやり方だとマスターは

言う。

因みにマスター自身は、直接依頼が来ることが多くなっているために、自分から賞金稼ぎの仕事を探すことは滅多にしなくなったぞうだ。

「故にわたしの場合、この店からなかなか離れられなくてな、幹也も始めるのはいいが、くれぐれも無茶な仕事は請け負うなよ。人間死んだらそれまでだからな、細かいことは武人に聞くといい、依頼の上級・初級ぐらい見分けがつかはずだ」

「分かりました。今度武人に話してみます」

「うむ」

そしてしばらく会話しているところに、藍と武人が帰ってきた。

第五章 1 (第三者)

言葉の力

天井に黒い大赤斑だいせきはんのような渦がゆっくりと流れており、ステンドグラスに囲まれた静かな空間、空気は淀んでおり湿っぽく、邪気が蔓延していた。ここは、決して人間が踏みえること無い魔境である。サヤは椅子に腰掛け、自分の以外に帰って来ることが出来た人物を考えていた。ラドルグの言う三人とは一体誰なのかを

サヤが、一人一人の魔族を浮かべて考え込んでいるところに、青いローブを身に纏った、貴族のような男が通りすがった。男はサヤを一瞥して立ち止まり、顔も向けず声を掛ける。

「久しぶりだな」

サヤは、俯きながら聞いた声に懐かしさを感じ、ほっとしたように微笑んだ。

「一人はあなただったのね、おひさ」

「……」寡黙そうな男は返答に困った。サヤは、それを見透かしたように言葉を重ねる。

「おひさって言うのはお久しぶりですって意味よ」

男はゆっくりとサヤに向き直り、鼻で笑って返す。

「そんなくだらない知識を身につけてきたか、サヤ・ヴァレスよ」

互いの目が合う。見詰め合うことで、懐かしき記憶を思い返す。彼らは再会したのだった。

「くだらなくなんてないわ、むしろ必要になりうる知識よ、私のいた世界では、八割の人間すべてが、交流できる力を持っていたし、言葉や接触もそれなりに築き上げた分明だったのよ」

「八割の人間すべてが交流できるだと……」

この世界では考えられない通信技術を、世界の八割の人間が交流できる能力だと、サヤは解釈していたのだった。

携帯電話・ネット・メールなどが日常に当たり前ように存在して、それらの知識に強い武人に接していたが故に、素人目に取り違えてしまったのである。

「メールって言うらしいの、ほとんどの人間が持っていた能力なのよ、もしこの世界にそれがあつたらと思うと、ぞつとしない？」

人間の統一、情報の共有、文明の発達など……彼らは、この世界では考えられないような恐ろしい力へと発想してしまう。

「確かに……しかし、そのおひさには、どう繋がる……」

「これは、略語つとって文章を小さくして相手に伝えるための言葉よ……私が構想した話なんだけどね。私が行った世界では、メールって言う能力をほとんどの人間が習得していたわ、文字で伝えることに進化の文明を導き出した世界だと思うの。その中で、伝えたい言葉を全部文字にしていたら、どうしても質量が増えるでしょ？ つまり、少しでも短く思いを伝えるために、進化の過程の中で略語というものが必然的に増えたんだと思うわ」

「人間と人間が文字で繋がる事で、文明が進化した世界というわけか……」腕を組む。

「簡単に言つとそういうことになるわね、言葉はすぐ消えるけど、文字はすぐには消えないわ。次世代に残り進化の糧となり、進化を早めることになるのよ」

異世界を見てきた彼にとって、この話は作り話だと断定することは出来なかった。それゆえ、話は突拍子もなく信用しにくい内容ではあるが、男は頷き感心するに留める。

そんなサヤの話が進む中へ、一羽のカラスにも似た、茶黒い鳥が紛れ込んで来た。そして茶黒い鳥は一声鳴き、サヤの脳に語りかけた。

「我だ、奴らは面白い者達だな、行く末が楽しみだ」

その言葉に、サヤは事が順調に進み始めたことを悟り、思わず揺む口元を男に悟られないようにそっと隠した。

「今の、クドネシカ卿の使い魔だったな」

「そつね」

この世界の上級魔族には、情報のやり取りを行うために【使い魔】という名の魔獣を飼っている者が多い。使い魔の形は様々で、小動物のようなものが多く、サヤの脳に語りかけたカラスにも似た茶黒い鳥も、その類だった。

「……………」男はサヤをチラッと見た。

「大丈夫よ、やっと落ち着いたところだし、話を続けましょ」

「そうか……」

「早速聞きたいんだけど……私がいなかった間の戦況を教えてくださいませんかしら？」

「ああ……俺も帰って来たのは半年ほど前だからそこまで細かくは把握し切れてはいないが、聞く限りじゃ各地の戦況は酷い。未だに局地的に散発的な小競り合いが大半なのが救いだ、全体的に見れば明らかに分が悪いといえる」

不甲斐ない魔族をサヤは鼻で笑った。男はそれを気にも留めず、話を続ける。

「その上、三年も経って無事に帰って来たのが、俺も含めてお前で四人目。更に追い討ちをかけるような朗報だが、南の大陸にある人間の王国が崩壊。その混乱に乗じて、その地方の魔族は有力な数人を除いて、風潰しに殲滅されたと聞いている。確実な情報は無いが、神族が暗躍していたのは言うまでも無いだろう」

「予想以上に状況が悪化しているのね、南のサンツコン大陸一帯となると、神族の好き放題にさせるには些か規模が大き過ぎるわ」

「その通りだ……」

サヤは重い腰を上げるように話を纏め始めた。

「状況が不透明過ぎる上に、支援できる魔族も殲滅されているとな

ると、まずは目立たずに影で動ける人材を送る必要があるわね。それに、出来るなら人間に敵対視されている私達魔族よりも、警戒されない人間が理想。ともすれば貴方の連れてきた能力者はどんな状況かしら？」

「奴らにか……」

男は考えるように、腕を組んだ

「国の酒が恋しくなるな……」

広々とした草原の小高い丘の頂上、辺りに散らばるモンスターの死骸を気にも掛けず、月明かりに照らされながら酒を飲み交わす三人の者がいた。

浮かぶ満月を見つめながら、望郷の念を込めて呟いた女。全身から頬にかけて彫られた刺青と、月明かりに瞬く銀髪が、遠い目をする表情にどこか哀愁を含ませる。

「それだけ飲んで、まだ飲み足りないんスか？」

「……飲み過ぎです」

ともすれば、呆れと諦めの交ざった非難を浴びせる二人の男女。共にひらひらとした軽い服に短髪の黒髪、幼さの残る顔立ちも似通った双子。一見すると見間違いかねない外観に反して、早口な粗暴さと舌足らずな寡黙さの差が、性格の違いを強く表している。

そんな二人が揶揄するように視線を向けた数本の空になったボトルの大半は、銀髪の女が飲み散らかした物だった。

当の本人は非難を気にも掛けず、新しいボトルに手を伸ばす。

「お子様には分からんだろうが、情緒というものが足りないんだよ。美味しい酒はここにもあるが、飲み慣れた味には敵わないものだ」

言いつつボトルを煽る女。双子は既に無駄と達観して、止める事もせずに促すだけ。

「だったらこんな所でのんびりしてないで、さっさと次の町に向かいましょうよ」

「……………帰る方法、早く探します」

そう促しながら、互いの器に酒を注ぎ足す二人。

「急いた所でどうこうなるものじゃないさ。己の魂の赴くままにいればこそ、こうして美しい月夜を楽しめるんだからな」

微笑みと共に二人に向けてボトルを揺らし、乾杯の仕草をする女。双子もそれに倣って飲み交わしながら、行動と裏腹に再三の促す言葉を掛ける。

この世界に迷い込んで半年間、一向に変わる気配のない三人の緩やかな旅路だった。

寡黙そうな男は、自由奔放な彼女らが、どんなことがあるうとも魔族の頼みを聞くような者達ではないと察していた。決して適する人物とは言えない。

「申し訳がないが、俺の連れてきた適合者に、今の話を持ちかけたところで、すんなりと承諾してくれることはないだろう……」

「あら、なぜ？」

「俺にも手が余るほど自由奔放に動き回る奴らだ。何か起きないかぎり、乗ってこないだろうから……」

「乗せずに乗ってくるのを待つってことね？ まったく、そんな奴らで使い物になるのかしら？」

サヤは思わずため息を零した。

「俺には荷が勝ちすぎるが、単純な戦力としては十分保障できる。とはいえ、どうにもムラツケがありすぎるからな、似合いそうな要所で使うのが無難だろう」

サヤは、サンツコンに向かわせる人間を選ばなければいけないと思った。しかし、幹也・藍・武人の誰かに割り当てるのは不十分、他の人物を探り始める。

「他の適合者……そもそも、私達以外に帰って来れた二人って誰なの？」

サヤは、男を目を細めて促した。

「……一人はお前の大嫌いな、自称【破壊屋】ことマールル・レスカー。もう一人は自称【クドネシカ卿の一番弟子】ことガラック・ブリナクだ……」

「悪い冗談ね、よりによって死んでいてくれた方がマシな二人なんて……皮肉にも程があるわ」サヤは、大きなため息をつく。

「お前からすれば、残念ながら……と言う他ないな。因みにガラックの連れてきた適合者は二人、共に話にならん。既に一人は死亡、一人は廃人だそうだ。マールルの方は使い勝手の良い即戦力らしい」
「どんな奴らかは聞いているかしら？」

「否応無く耳に入ってきてるさ、マールルの馬鹿が無茶しすぎてるからな。適合者が能力を得るなり、報酬を餌に神族にぶつけまくってるそうだ。人数は三人、男が二人に女が一人。内の一人は既に死亡、残りの二人は……」

大陸の東の果てにある小さな島国の南端。海に面した穏やかな気候の小さな町の山間に、その土地の豊饒を司る神を祭る社が建っている。いや、正確には建っていたと言ふべきだろう。

僅か数時間前には社として建っていた建物は、町中に響き渡る轟音と共に廃墟と化していた。

突然の轟音に、何かと集まった町の住人はその異常な光景に言葉を失う。神域としていた神族が、まるで糸の切れた操り人形のように、あり得ない方向へと捻じれた四肢と分断された胴体を晒している。そして、それを見下ろす二人の男女。

見下ろしていた二人は集まり始めた人々を一瞥して、社から町へと繋がる石段に向けて歩き始める。男は何事も無かったように悠然と、女は少し肩を落としてつつも淡々と。

返り血を浴びた見知らぬ二人が近づいてくる様に、住人達は戸惑って動く事もできずにただ訝しげな視線を投げかける。

そんな視線も意に介さず、二人は住人を無視して石段を下っていく。

「……まるで、犯罪者にでもなった気分ね」

視線に耐えかねたように、女が男に向かって呟く。

「間違っちゃいないだろ。少なくともこいつらにとっては、俺達は犯罪者だ。まあだからって気にすんな、別に俺達が悪人だって訳じゃない」

歩みを止めないまま、男は彼女の頭を軽く撫でる。

「それでも、殺さなくても別の手段はなかったのかなって考えさせられるじゃない。こんな嫌な視線を浴びるのは嫌だから」

「くくっ……俺達にや力があるんだ、それを使うのは当然だろ？」

彼女は撫でられていた男の手を払って、視線を上げて睨んだ。

「……他人がそれに相容れないとしても？」

男は軽く肩を竦めて、睨む彼女の瞳にじっと視線を合わせた。

「それを俺が正しいと信じられれば、間違っているはずが無いだろう？ 過程なんてものは関係ない、それによって起こる結果がすべてだ」

「……………」

「だからお前も俺についてくる。だから俺は間違っていないと信じられる」

そう言っつて破顔すると、彼女の頭をくしゃくしゃと掻き撫でる。

「むにゃ〜〜うざい、触んな、死ね！」

「くくっ……まーた可愛い事言っちゃって」

暴れる彼女を面白がるように余計に撫で回し、胸元に手を伸ばした所で顔面的に的確に拳が決まった。

「変態！ 時と場合を考える！」

叱ると同時に自分達を囲む視線に改めて気がつき、顔を赤らめる。それに気づいた男がスツと周囲を睨みつけると、人々もばつが悪いのか目を逸らした。

「さーて、さつさとマーリルの旦那の所に戻りますか。胸糞悪い事の代償だ、それなりに吹っかけないと割りに合わねえ」

軽い調子でそんな事を言いながら、町を北に出る街道に向かって道を折れる。

「……どうせまた、帰る方法とは無関係な報酬しか貰えないんだろうけどね」

ため息混じりに後に続く彼女が、沈んだ様子で呟いた。

「何でもいいさ、貰える物なら何だつて貰つとけ。そんなもんは井勘定でいいんだよ、足りないよりはマシだろ？ 来ちまったもんはしょうがねえんだから、後はどれだけの物を持って帰れるかってだけだ。あいつがそれを持ってないんなら、搾り取るだけ搾り取って、自分達で帰る方法を見つけりゃいい」

軽い口調で言い放つ男を、彼女はジト目で睨みつける。

「こんな経験も一つの糧だ、とでも言いそうな勢いね」

「くくく……よく分かってんじゃない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4539u/>

B.A.R

2011年9月11日16時29分発行